

北 越 北 線

埋蔵文化財発掘調査報告書

1974

新潟県教育委員会

北 越 北 線

埋蔵文化財発掘調査報告書

—埋蔵文化財緊急調査報告書第2—

1974

新潟県教育委員会

## 序

本書はこのたび上越線六日町から中魚沼・東頸城両郡を経由し、直江津方面に結ぶ北越北線の敷設に伴ない、工事法線内にかかる十日町市城之古遺跡・川治百塚第6号塚の2遺跡について、日本鉄道建設公団の依頼により、新潟県教育委員会が調査主体者となり、昭和48年6月に発掘調査を実施したその報告書である。

城之古遺跡・川治百塚第6号塚の発掘調査によって、共に新しい事実が確認され、また学術的成果を得ることができた。本書が埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるものとなり、学問研究に少しでも役立つならば幸である。

発掘調査の実施にあたっては文化庁からご指導を賜り、日本鉄道建設公団・同十日町鉄道建設所をはじめとし、十日町市教育委員会・十日町市環境開発課・株式会社福田組北越北線十日町作業所、調査にあたられた関係各位、地元の方々からご理解とご協力を賜ったことに対し、深甚なる謝意を表する次第である。

昭和49年3月

新潟県教育委員会

教育長 矢野達夫

## 例　　言

- 1 本書は北越北線の建設に伴って消滅する十日町市城之古遺跡・川治百塚第6号塚につき、日本鉄道建設公団から新潟県教育委員会が委嘱を受け、昭和48年6月4日～23日までの20日間発掘調査を実施したその報告である。
- 2 遺物の整理作業は県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当職員があたった。
- 3 本書の執筆は発掘担当者を中心にして各調査員との共同討議検討の上、分担執筆をしたもので、文末に執筆者の氏名を明記した。
- 4 遺物の実測・写真撮影・図版の作成は、関係する各項の執筆担当者が主としてあたり、発掘担当者と協議しながら作業を進めた。
- 5 城之古遺跡の報告の図版中に島田靖久氏が表掲した資料の一部を使用させていただいた。
- 6 川治百塚の塚番号は十日町市教育委員会の調査によって付けられた一連の番号を使用し、さらに本調査中に確認したものを附加した。
- 7 報告文中における諸氏各位の氏名については、敬称を略させて頂いた。
- 8 発掘調査および遺物整理において次の諸氏・機関から御指導・御助言を賜った。（敬称略・五十音順）。

阿部義平・安藤文一・池田　亨・上野　章・金子皓彦・計良勝範・計良由松・小島俊彰  
小林達雄・小林　孚・竹田道雄・武田正史・中村孝三郎・藤巻　誠・森島　穂  
佐渡博物館

## 目 次

第Ⅰ章 調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る経過	
第2節 発掘調査	
第Ⅱ章 遺跡の地理的歴史的概観	5
第1節 中魚沼地方の地形と遺跡の立地	
第2節 歴史的環境	
第3節 遺跡の周辺	
第Ⅲ章 城之古遺跡	10
第1節 中魚沼地方の弥生文化の研究	
第2節 グリットの設定と層序	
第3節 出土遺物	
第Ⅳ章 川治百塚第6号塚	20
第1節 川治百塚について	
第2節 第6号塚とグリットの設定	
第3節 内部構造	
第4節 出土遺物	
第Ⅴ章 考察	29
第1節 城之古遺跡の弥生式土器について	
第2節 川治百塚と第6号塚の性格	
〔I〕 新潟県における塚について	
〔II〕 密教と塚の形態	
〔III〕 円形プランで断面が半円形をなす塚	
〔IV〕 方形プランで断面が台形をなす塚	
〔V〕 方形プランで断面が土塔状をなす塚	
〔VI〕 川治百塚と第6号塚	

## 図版目次

- 図版第1図 1 城之古遺跡全景（東より）  
2 城之古遺跡発掘状況
- 図版第2図 1 城之古遺跡直崖下の湧水地  
2 城之古遺跡G—75グリット土器出土状態  
3 城之古遺跡F—76グリット有孔土製品出土状態
- 図版第3図 城之古遺跡出土土器
- 図版第4図 城之古遺跡出土土器・土製品・石器
- 図版第5図 1 第6号塚旧全景（南西より）  
2 第6号塚立木伐採後の全景（北西より）
- 図版第6図 1 第6号塚発掘スナップ  
2 第6号塚発掘状況
- 図版第7図 1 第6号塚19D～19G北西セクション  
2 第6号塚19G～20G南西セクション
- 図版第8図 1 第6号塚石組（南西より）  
2 第6号塚石組（北西より）
- 図版第9図 1 第6号塚19M～19Oにおける周溝  
2 第6号塚11G～13Gにおける周溝
- 図版第10図 1 第6号塚刀出土状態  
2 第6号塚刀子出土状態  
3 第6号塚土師器出土状態  
4 第6号塚刀出土状態
- 図版第11図 第6号塚出土遺物
- 図版第12図 1 第7号塚全景（北東より）  
2 第19号塚全景（東より）

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と地形図(1/50000).....	4
第2図 信濃川段丘面と弥生遺跡の分布図.....	6
第3図 遺跡周辺図.....	9
第4図 城之古遺跡グリッド設定図.....	折り込み
第5図 城之古遺跡G-75・G-76セクション図.....	11
第6図 城之古遺跡出土の土器・土製品.....	13
第7図 城之古遺跡出土の土器.....	15
第8図 城之古遺跡出土の石鏡・玉.....	19
第9図 川治百塚第10号塚出土の和鏡.....	22
第10図 川治百塚第6号塚実測図.....	23
第11図 第6号塚石組実測図.....	24
第12図 第6号塚断面図.....	折り込み
第13図 第6号塚出土遺物実測図.....	27

# 第一章 調査の経緯

## 第1節 発掘調査に至る経過

上越線六日町駅から分岐して十日町・松代を経て信越線犀潟に至るこの間約70kmの北越北線は、新潟県の豪雪地帯である中魚沼郡と東頸城郡を連絡し、同地方の産業経済の開発を促進すると共に、関東地方と北陸地方を結ぶ短絡線としてきわめて重要な鉄道線とされて昭和39年9月28日に工事線に指定され、まず六日町～十日町間が日本鉄道建設公団東京支社の所管事業として第一期工事に入った。

次いで昭和47年10月14日に十日町～犀潟間の認可があり、法線發表がなされたが、この段階で日本鉄道建設公団東京支社長・平岡治郎から新潟県教育委員会教育長・矢野達夫に対して北越北線十日町～犀潟間のルート内の遺跡分布調査の依頼があった。このため昭和48年4月16日にとりあえず着工時期がせまる第二期工事分としての十日町駅から信濃川までの1.688km間の現地調査を県文化行政課担当職員2名が十日町の現地に出向き、日本鉄道建設公団東京支社十日町鉄道建設所長・関 美夫、十日町市教育委員会社会教育課長・植熊 敏、同社会教育主事・田村達夫、十日町市環境開発課係長・金沢重夫の立ち会いのもとで実施した。

この現地調査の結果、弥生時代の城之古遺跡内を法線が走り、また川治百塚第6号塚に法線がかかることが判明したので、県教育委員会は昭和48年5月2日にこの2遺跡について工事着工に先き立ち発掘調査が必要である旨を日本鉄道建設公団東京支社十日町鉄道建設所長関 美夫に文書をもって通知した。

その後、この連絡を受けた日本鉄道建設公団東京支社では、その主旨を理解され、2遺跡の発掘調査の実施と共に工事中に他において遺物・遺構が発見された場合、ただちに県教育委員会に連絡するとの基本線を了解された。それ以降、発掘調査の具体的な事項について両者の間で連絡協議を重ね、ともに昭和48年5月31日、城之古遺跡・川治百塚第6号塚に関する最終協議を新潟にて行って、昭和41年4月1日に文化庁と日本鉄道建設公団との間に交換された覚書に基づき、昭和48年6月1日に日本鉄道建設公団東京支社長が委託者、新潟県が受託者となり、城之古遺跡は法線にかかる部分、川治百塚第6号塚はその全体の発掘調査を昭和48年6月4日から6月23日までの20日間にわたって実施する契約に調印した。

(戸根与八郎)

## 第2節 発掘調査

城之古遺跡・川治百塚第6号塚の発掘調査は、新潟県教育委員会（教育長・矢野達夫）が発掘調査主体者となり、県文化行政課埋蔵文化財担当職員を中心に、県内の考古学研究者を調査員に依頼し、また地元の城之古・北新田の両部落からは調査作業員として有志の人々の協力を得て、昭和48年6月4日より発掘調査を開始した。なお、発掘に際しては、2遺跡を対象としたために、前半を城之古遺跡、後半を川治百塚第6号塚の調査に主体をおくことにして、発掘調査の方法は最初グリット方法をとり、遺構・遺物の出土状況などにより全面発掘に切り替えてゆくことを基本的態度とした。

6月4日 発掘用具・資材の搬入、テントの設営などを行なう。

5日から7日までは、6号塚の部分測量ならびに城之古遺跡の発掘予定地域内にグリット設定の基本杭を全長186m、幅14mにわたって打つ作業を行ない、調査の諸準備は完了した。

6月8日 午前中6号塚の前面で鉄道建設公団十日町鉄道建設所、福田組北越北線十日町作業所、十日町市当局、地主ならびに調査員・調査作業員が列席して塚供養祭を挙行する。その後ただちに城之古遺跡の実質的発掘調査に着手した。

6月10日 発掘地域全域の試掘グリット方法による調査は完了した。これまでの段階で、G-72・75、E-74、A-90に遺物の集中が見られ、縄文式土器・弥生式土器それに近世陶磁器片などが出土している。

6月11日 今までの土層堆積状態および遺物の出土状況などを検討した結果、遺物が出土しているグリットに隣接するE・F・G-71~76グリットの全面発掘を行う。F-76では土製紡錘車が、各グリットからも弥生式土器の破片が第Ⅱ層の疊混入黒色砂層より出土した。

6月12日 グリットの断面図・柱状図の作成、写真撮影などの作業を行ない、城之古遺跡の発掘調査は午前中に完了した。午後から川治百塚第6号塚の発掘調査を開始した。塚の長軸のほぼ中心を交点Pとして、セクションベルトを十字に残すようにし反時計廻りでA・B・C・Dの4区に分けた。とりあえずC区を掘り下げる。墳丘の表面全域に杉が植林されていたため、抜根作業に予想外の時間を要した。表土中より近世の茶碗・摺鉢片が数点、19Iの現地表面下0.37mからは打製石斧が、19Hでは第Ⅱ層直上より刀片が出土した。

6月13日 B区を掘り下げる一方、周溝の有無を確認するために19L~19Oを掘り下げる。この結果、幅4.50m、深さ0.2~0.3mを測るU字形の周溝が確認された。墳頂に近い19Gの表土下面より北東~南西に向って続く疊群が検出された。遺物は表土および第Ⅱ層の黒褐色土層中より土師器片が散在的に認められた。

6月15日 B・C区ともに基盤層まで掘り下げる。18Gの礫群付近より刀子が1点、18Hより砥石が2点出土したにすぎない。

6月18日 A区を掘り下げると共に周溝の方向を確認するために12G～15Gを拡張する。周溝は11G～13Gにかけて検出され、19M～19Oにかけて検出された周溝に接続するものと思われた。黄褐色粘土層に近い18Hの黒色土中より縄文式土器が2片出土する。

6月19日 残る一区画のD区に入る。遺物は表土および第Ⅱ層より土師器片、近世陶磁器片が混在して出土しているが、第Ⅱ層以下からは1点も出土しなかった。

6月20日から22日にかけては、礫群の写真撮影・実測作業を行う。これと並行して南西部の周溝のカーブを把握するために12K～14K・14L・14Mを掘り下げる。また各区の補足調査を行なう。

6月23日 断面図の作成、周溝の平面測量などを行う。午後より塚の埋め戻しを器材の点検・整理と併行しながら行う。夕刻には多大なる成果をあげて、両遺跡の調査は完了した。

(戸根与八郎)

城之古遺跡・川治百塚第6号塚の発掘調査は、下記の人員構成で実施されたものである。

調査担当者 金子 拓男（県教育庁文化行政課文化財主事・日本考古学協会員）

調査員 本間 信昭（県教育庁文化行政課主事・日本考古学協会員）

福岡 嘉彰（県立美術博物館学芸員）

家田順一郎（県教育庁文化行政課嘱託）

戸根与八郎（県教育庁文化行政課嘱託）

駒形 敏朗（県教育庁文化行政課嘱託）

石沢 寛二（県文化財保護指導員）

島田 靖久（十日町市文化財審議委員）

調査作業員 十日町市城之古、北新田部落の有志

調査協力員 十日町市教育委員会

十日町市環境開発課

福田組北越北線十日町作業所

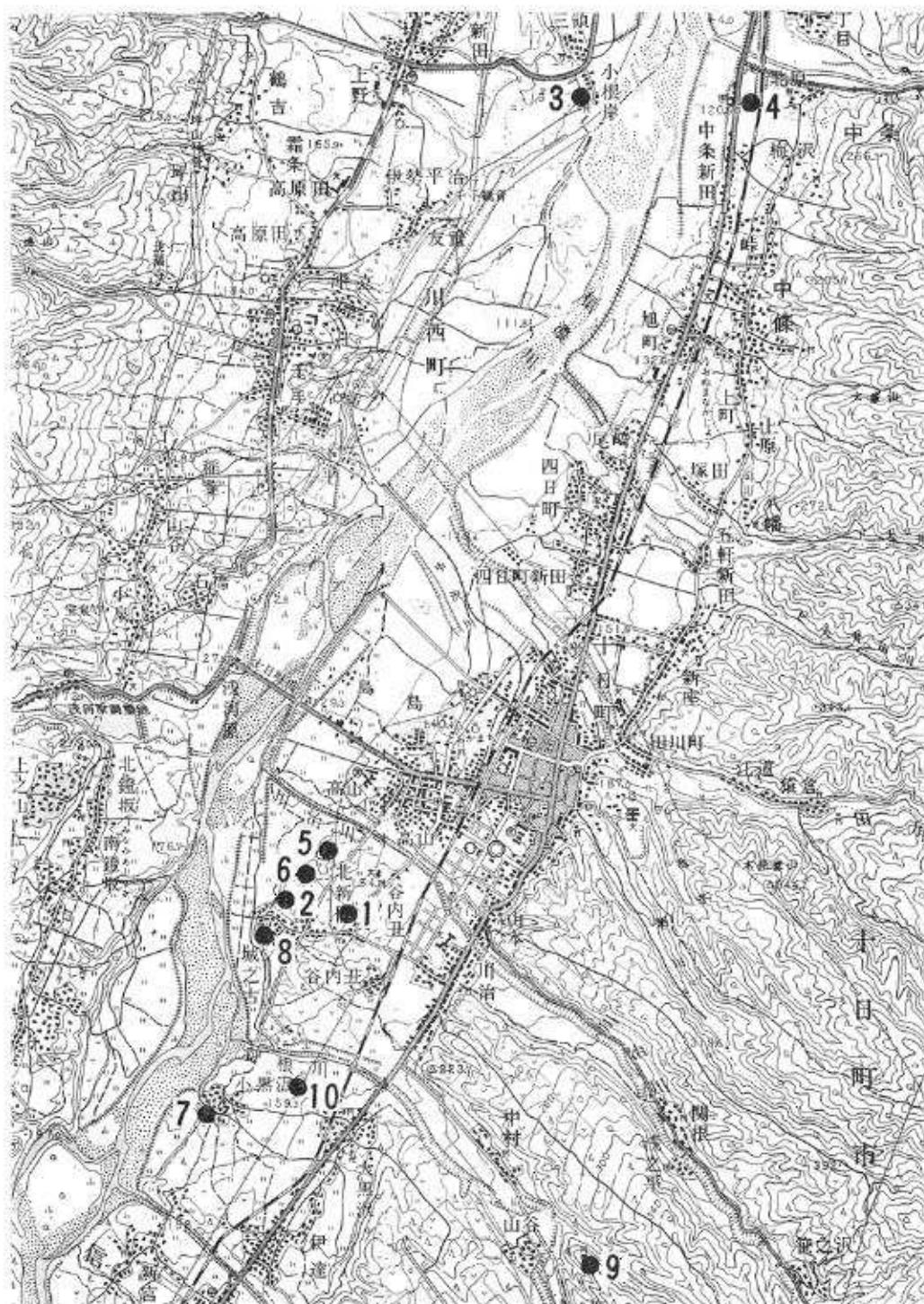
岡村 芳雄・阿部 昭二・柳沢 清松

雲野 松蔵・岡村 森平

事務局 柴野 達男（県教育庁文化行政課管理係係長）

小野 栄一（県教育庁文化行政課管理係主事）

刈部 啓子（県教育庁文化行政課嘱託）



第1図 遺跡の位置と地形図 (1/50000)

- 1. 川治百塚第6号塚
- 2. 城之古遺跡
- 3. 小根岸弁天社遺跡
- 4. 北原西遺跡
- 5. 上塚原B遺跡
- 6. 西浦遺跡
- 7. 牛ヶ首遺跡
- 8. 麦芭懸城跡
- 9. 秋葉山城跡
- 10. 小黒沢梵字碑

(地図出典：国土地理院「十日町」「松之山温泉」「小千谷」「岡野町」昭和48年発行)

## 第Ⅱ章 遺跡の地理的歴史的概観

### 第1節 中魚沼地方の地形と遺跡の立地

信濃を流れている犀川と千曲川とが長野市附近で合流し、信濃川となり国境をこえて越後にはいる。そこが中魚沼地方であり、東西に連なる山脈と南北の地峡により、南北に長い盆地状地形をなし、封鎖的な地理的景観をなしている。城之古遺跡・川治百塚はこの中魚沼地方の十日町市川治地区に所在する。

新潟県の中部平野山地丘陵区に含まれる（新潟県第四紀研究グループ 1971）中魚沼地方の地形は、信濃川低地、津南・十日町台地、川西・小千谷台地、魚沼山地、苗場火山の5地形から成っている。信濃川の両岸には信濃川低地が発達し、東には当間山、樹形山などの魚沼山地があり、南には苗場火山がひかえ、信濃川と魚沼山地・苗場火山の間に津南・十日町台地がひらけ、北には川西・小千谷台地がひかえている。

これら地形の基盤層は魚沼層群と呼ばれる第三紀層から成っており、魚沼層群は東西に大きく褶曲している。信濃川は褶曲する魚沼層群の向斜を N50°E で北上し、両岸に8面の河岸段丘を形成して小千谷方面に抜けている。段丘形成は信濃川右岸において顕著な発達がみられ（第2図）、十日町市附近の右岸では洪積段丘の米原面—城山I面と沖積段丘の大割野面I—根深面の両段丘の発達がみられる（信濃川段丘研究グループ 1970）。また、この地域は当間山・樹形山などの魚沼山地から流れ出る当間川・羽根川・川治川・大井田川等の小河川があり、信濃川に対して直角方向に流入している。したがって、これら小河川はひな壇状を呈す河岸段丘をたちきっており、飛渡川と大井田川とにはさまれた十日町市中条地内、大井田川と田川との間の十日町市四日町地内、田川と川治川との間の十日町駅周辺、川治川と羽根川との十日町市川治地内、それに羽根川と入間川との間の十日町市小黒沢地内等のいくつかの東西にのびる帯状の地域ブロックが形成されている。これら河川と山地に挟まれた地域ブロックは、明治以降の行政区域の単位となっており、そこに居住する人々の生活を大きく規制していたと思われる。

城之古遺跡・川治百塚第6号塚は旧川治村域の河岸段丘上に位置し、城之古遺跡はこの段丘の西端の段丘崖上の近くに、川治百塚第6号塚は段丘端より東に500mはいったところにあり、同一地域ブロックの段丘面上にある（第3図）。遺跡の周辺は畠地に利用されており、段丘崖には杉林が連なり、段丘下の沖積地は水田となっている。

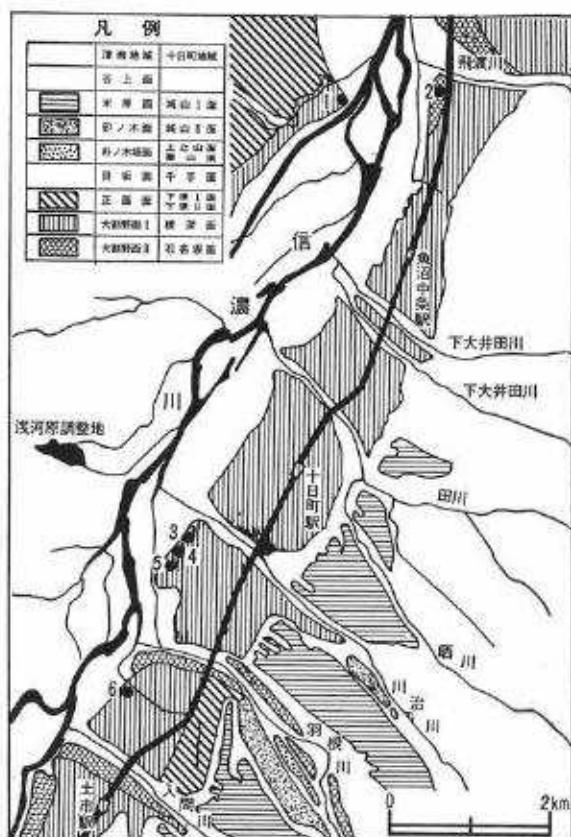
河岸段丘の発達が著しい津南町・十日町市の中魚沼地方はその研究が盛んである。

茅原一也は段丘が模式的に発達している津南地域に基準をおいて6段丘にわけ（茅原 1958），内藤博夫は十日町市附近の地形発達史を述べながら河岸段丘にふれ，3段丘にわけている（内藤 1965）。また，津南地域の段丘を高位段丘より谷上面，米原面，卯ノ木面，朴ノ木坂面，貝坂面，正面面，大割野面Ⅰ・Ⅱの8段丘にわけ，これと対比させながら十日町市周辺，小千谷市周辺の段丘を区分しているグループもある（信濃川段丘グループ 1968，信濃川段丘研究グループ 1970，新潟平野団体研究グループ 1972）。

十日町市・川西町における弥生遺跡と段丘との関係を示したものが第2図である。弥生遺跡は現在までのところ，(1)川西町小根岸弁天社遺跡（稻岡嘉彰 1969），(2)十日町市北原西遺跡，(3)上塚原B遺跡，(4)西浦遺跡（城之古B），(6)牛ヶ首遺跡（稻岡 1972）それに今回発掘の(5)城之古遺跡の6ヶ所が確認されている。この6遺跡は標高120m，信濃川からの比高20mの沖積世の河岸段丘上に位置している。北原西遺跡が大割野面Ⅱにある他は，大割野面Ⅰの先端部に立地し，それと同時に，小根岸弁天社遺跡以外は右岸に分布している。この地域の弥生遺跡の在り方にみられた「縄文文化遺跡に比べて，低位段丘，殆んど現第2段丘面に位置し，現在水田化されている所に位置している。分布は右岸に多く」（中川成夫他 1958）の表現は現在でも妥当といえる。

弥生遺跡が多くみられる右岸には沖積段丘である大割野面Ⅰ・Ⅱがよく発達し，逆に遺跡の少ない左岸にはこの段丘はあまりみられない。左岸の大割野面Ⅰ・Ⅱは左岸唯一の遺跡である小根岸弁天社遺跡附近の川西町小根岸から友重にかけての一帯に確認されるにすぎない。したがって，本地域の弥生時代の遺跡立地が大割野面Ⅰ・Ⅱのいわゆる沖積段丘ときわめて深い関係にあるものと考えられ，この地域における弥生遺跡の在り方を示唆していると思われる。

（駒形敏朗）



第2図 信濃川段丘面と弥生遺跡の分布図

## 第2節 歴史的環境

この中魚沼郡は越後国那珂郡と律令時代に呼ばれたところで、鎌倉時代には波多岐莊といわれ、興國2年（暦応4）に「妻在庄」を初見する地である（市河文書）。

12世紀越後を支配していた城氏が没落すると越後国は「関東御分国」となって東国色を強めると共に、白河院御領であった波多岐莊は新田氏が進出することになった。新田氏の一族は正応4年にはすでにこの地を安堵している（長楽寺文書）ので、13世紀中頃にはすでに新田一族のこの地の支配する体制にあったものと思われる。そしてこの新田の一族は大井田氏を中心に鳥山・羽根川他の各氏があり、大井田氏は波多岐莊の北半分を、鳥山氏は南半分を、羽根川氏は両者の中間の羽根川郷を領していた（水沢村史調査委員会 1970）。

元弘3年5月に新田義貞が護良親王の令旨を奉じて挙兵するとこれに応じて以来、延元元年備中福山城の戦までの間行動を共にし活躍している。その後新田一族は越後に帰り、北朝の上杉氏と激しく戦っている。興國元年宗良親王・新田義宗をいただいた妻有勢は志久見川を越えて信濃に乱入し、翌年には志久見川にて上杉朝定と戦い、正平七年鎌倉を占領したが足利尊氏と武藏国小手指原に戦って破れて妻有庄に退く一方では越後大半を制圧している。正平9年には宇加地城を攻めてこれを落して南魚沼を手中に治めたが、翌正平10年4月には青海庄で敗れ、志都乃岐庄・大島庄で戦っている。これと共に前年治めた南魚沼地方からも後退した。その後正平23年7月、越後守護上杉憲顯は急攻撃を開始し、これにより越後の新田一族は最後の拠点である妻有庄も失って壊滅した。

このような動きは南魚沼郡大和町大崎院・竜谷寺、六日町法音寺にある板碑銘文によっても知られる。すなわち、観応元年がみられる板碑は、正平7年10月8日とかわり、正平10年4月8日から文和4年8月27日に、延文元年10月10日から正平12年9月15日に、そして貞治5年丙午6日にかわり、以後は北朝年号のみとなる（細谷菊治 1972）。また新田一族の根拠地であった妻有庄においても板碑銘文では正平2年にはじまり、正平14年8月15日を最後としている。そして応安3年には確実に北朝側上杉氏の支配になっていた。（註）

新田一族を駆逐した上杉氏は、その後妻有庄の経営を進め、慶長3年に至って会津に転封するまでの間上杉支配が続くが、特に謙信が関東に進出するにあたっては交通上の要地として重要なところであった。上杉氏のあと堀氏へ、堀氏の後に松平忠輝へ、以後は天領・会津預り領として近世を終る。

（駒形敏朗）

（註）十日町市四日市神宮寺本尊十一面千手觀音の脇待、木造広目天立像背板裏面墨書銘に「右為風雨朽後二度造榮時也 奉造立此二天王前及五百歲応安三年庚戌卯月十八日 契口越後國波多岐大井郷内天福山神宮寺住持僧 勸進諸大且那合力仏師兵了公□□ 広明」とある。この応安三年は妻有地方で最も古の北朝年号銘である。（竹内道雄教示）

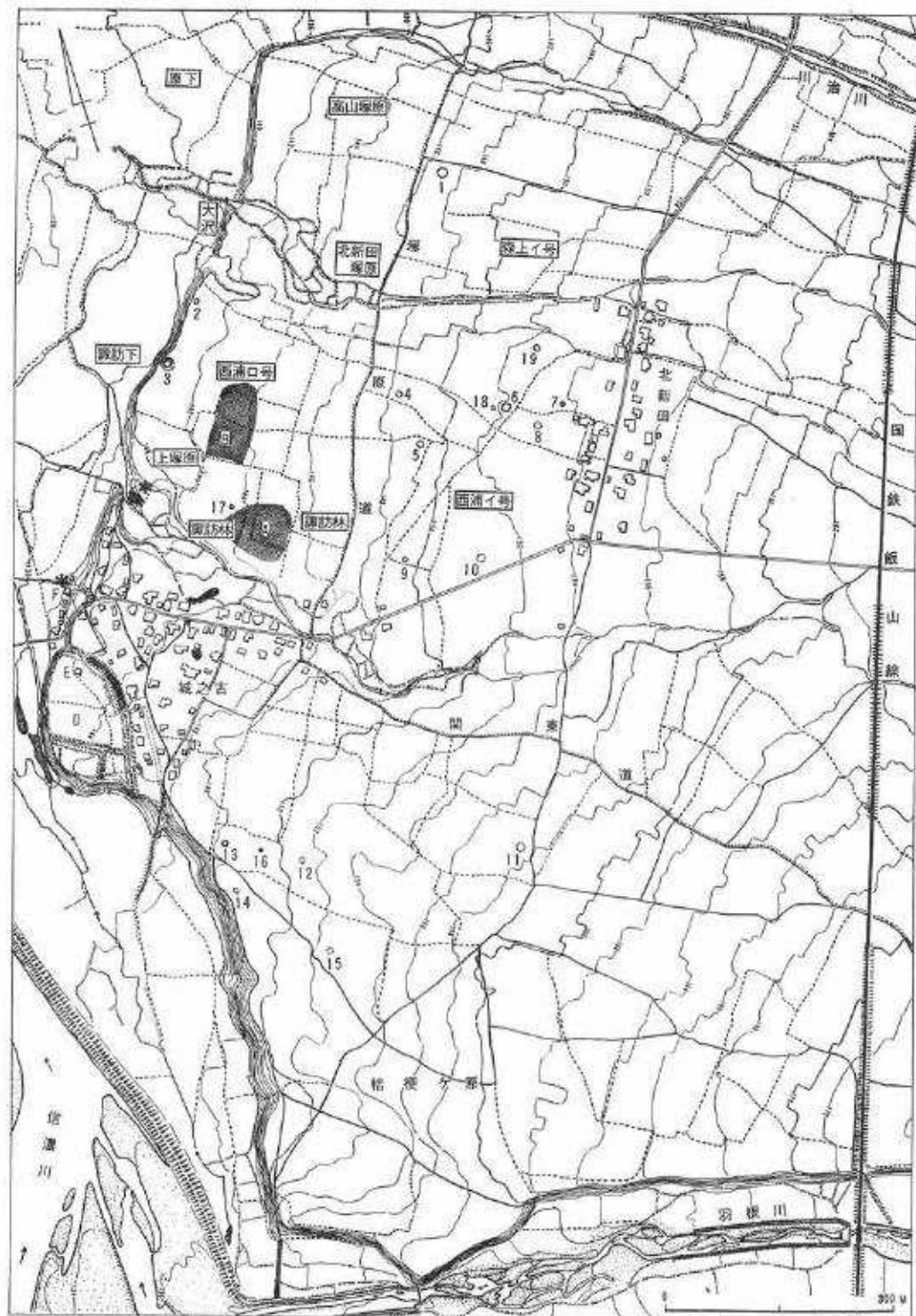
### 第3節 遺跡の周辺

城之古遺跡・川治百塚が立地する川治地区は、西は段丘崖下10~15mに信濃川の流れをみ、東は比高約70mの段丘崖があり、北と南は川治川・羽根川が深い谷を刻んだ東西1500m、南北1300m、面積約1.75km<sup>2</sup>のはば正方形を呈して北西に向ってゆるやかな傾斜をみせる信濃川第2段丘面で、周辺を自然の要害により回撻された独立した地域となっている(第3図)。台地上には大沢と上中沢の2本の沢がみられるが、段丘面であるため地表面では水が不足して高燥で、住民の日常生活や田の用水は伏流水を利用している。地下の伏流水は豊富で、段丘崖下には図版第二図の1の湧水がみられる(C)。城之古A遺跡(A)は、この湧水直上の段丘面にあり(図版第一図1)、A遺跡から北へ150mに城之古B遺跡(西蒲遺跡)(B)があり、両遺跡は大沢・上中沢に挟まれて存在する。また川治百塚の塚群は一帯に散存している(1~19)。台地西端の信濃川に向う段丘崖上の突出部には琵琶懸城址(D)がある。この城址は基本的には梯郭式で周巾は10mあって広く、土塁の規模も大である。また折ひずみや外枠形も認められることから戦国期のものと推定される。この城の北の(F)は「渡し場」と呼ばれ、対岸の鎌坂と結ぶ「渡し」が存在した。渡し場から東南に伸びる道は「カントウミチ」と呼ばれている。本渡しは、頸城→松代→城之古渡し→柄窪峠→塩沢→三国峠→関東と結ぶ中世・近世の関東への要路であった。この要路の中間的位置にある渡し場として重要なものであり、琵琶懸城はこの渡し場の地を確保維持するために築城されたものであろう。

この城址には新田義貞に従って勇名をはせた羽根川刑部の伝説がある。城址附近は羽根川郷と言い、琵琶懸城は羽根川刑部の築城で同氏の居館であったと伝える。城の南方の桔梗ヶ原は俗称馬場である。百塚の塚は弓の的であるとか、近くの秋葉神社には羽根川氏の旗が保存されているとか、城址内の琵琶懸觀音(E)は別名塚原觀音と呼ばれ、本尊は空海作の觀音像で羽根川氏の殿様の守り本尊であったとか、どこかに行って戦死した城の武士のウナリ声が城内から聞えるとか、城に青火が飛ぶとか多種にわたる伝説がこの地に残っている。

また上杉氏の軍勢に包囲されてまさに落城せんとしたとき、殿様は妻女を信濃川に面する裏口から逃した。妻女は信濃川を渡って対岸の鎌坂から城を振り返り見たとき、城は赤々と燃えていた。妻女が夫を思い落城する琵琶懸城を望んだその場所を「オトミ坂」(夫見坂)ということが鎌坂部落に伝えられている。さらに城内には石造の三十三觀音が各所に建立されているが、これは羽根川氏の怨靈を封ずるために建立したものと言う。

このような羽根川氏に関する伝説や地名として羽根川が残るこの地は、羽根川氏の根拠地と考えられ、琵琶懸城が羽根川氏の居館であったことが推定される。しかし現存の城址は羽根川氏の居館の跡地に上杉氏の手で大規模に修改築されたものであろう。(金子裕男)



第3図 遺跡周辺図

## 第Ⅲ章 城之古遺跡

### 第1節 中魚沼地方の弥生文化の研究

中魚沼地方における弥生遺跡の確認は、昭和29年11月に信濃史料調査会の信濃周辺地域の弥生文化を調査するため大場磐雄博士と共に当該地方を来訪した樋口昇一が、十日町市「城之古」遺跡の表面採集資料中から弥生式土器を摘出したことに始まる。この調査は戦後中央学会の専門家による最初の調査であり、また弥生遺跡の存在確認は、地元研究家の刺戟となり、次の遺跡発見の作業を促進させるに十分なものがあった。

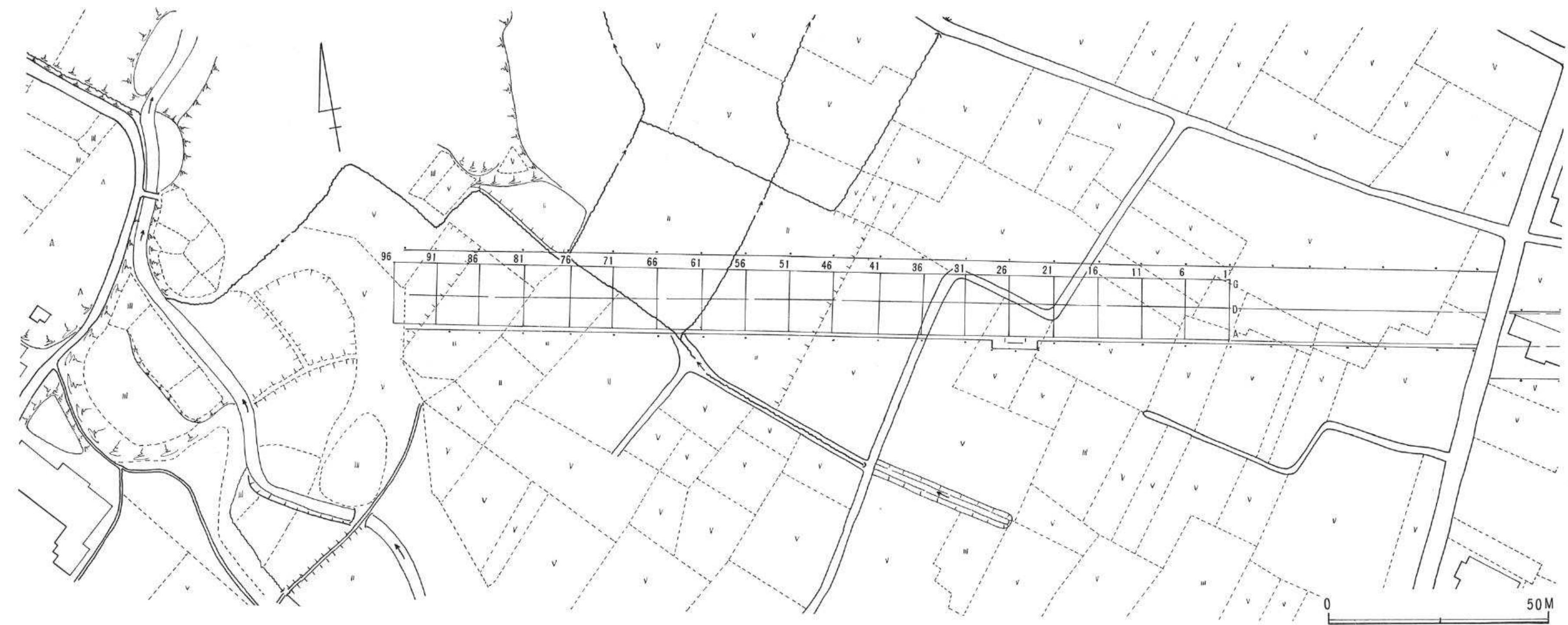
その後、昭和32年6月に新潟県教育委員会は、中魚沼地域の総合調査を実施したが、その際の考古部門は本間嘉晴・中川成夫・芹沢長介等を中心とし先史遺跡の確認と出土遺物の考察がなされた。その結果は新潟県文化財年報第3「妻有郷」として出版された。

それによれば、当該地域の先史遺跡は、先土器遺跡が11ヶ所、縄文遺跡が105ヶ所、弥生遺跡が11ヶ所確認されている。このうちの弥生遺跡11ヶ所は、津南町では谷地・宮ノ原・釜坂の3ヶ所、中里村では坂の上・早稲田・下ノ原の3ヶ所、十日町市では城之古・西浦（城之古B）・蟹沢・北原西・中山の5ヶ所である。しかし中里村坂ノ上遺跡（泉竜寺遺跡）出土の土器は、縄文前期諸磯A式の土器を指摘するとの誤りをやっているので、遺跡は10ヶ所になる。各遺跡の出土土器は壺形土器・甕形土器の小破片で、量的にも微量である。石器は城之古の大形蛤刃石斧と西浦の石鎌、土製品は城之古・北原の紡錘車等である。いずれも採集資料であるため詳細は欠けるが、当該地域の弥生文化は北信濃系統、すなわち千曲川水系の文化圏との交流を考察した。

昭和40年になると川西町小根岸地内でアメリカ式石鎌が採集されて、信濃川左岸での遺跡確認がなされ（稻岡嘉彰 1969）、昭和45年には十日町市新宮地内で牛ヶ首遺跡が発見され、十日町市教育委員会主催で発掘調査が実施された。牛ヶ首遺跡では1住居址に伴なう一時期に限定される資料が得られ、独自性をもちながらも信濃の栗林式と百瀬式土器の影響が顕著で、また後期初頭の尾崎式や箱清水式等の櫛目文土器に結びつく性格を持つことが把握された（稻岡嘉彰 1972）。

牛ヶ首遺跡の弥生式土器は、発掘調査によって得られた初の資料であり、出土遺物も量的には比較的多く、または完形の土器もあり、きわめて良好な資料として当中魚沼地方の弥生文化の本格的研究を進める第一歩としての役割をもった。

このたびの城之古遺跡の調査は牛ヶ首遺跡の調査に次ぐものであった。（稻岡嘉彰）



第4図 城之古遺跡グリッド設定図

## 第2節 グリットの設定と層序

発掘調査の対象地域は、「全国遺跡地図」新潟県 1004 の城之古A遺跡と同 1024 の城之古B（西浦）遺跡の中間地である。当該の地では遺物の採集はできないが、弥生式土器を出土する両遺跡の間にあって、弥生時代の集落構造を考える上で問題を有する地点と推定された。

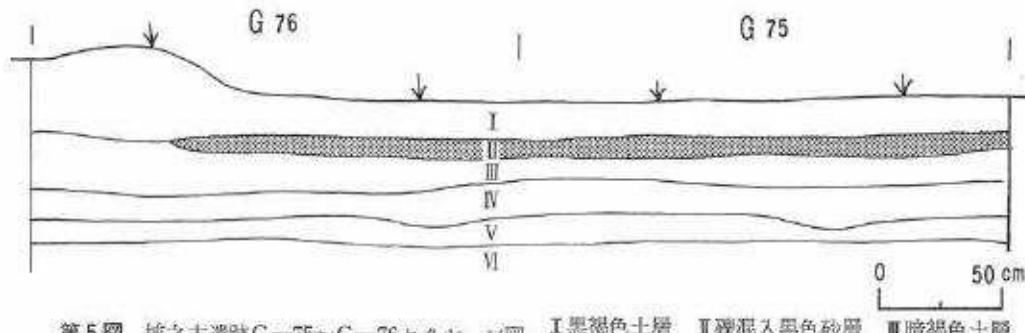
グリットは $2 \times 2\text{m}$ を基本区画とし、工事用地内の17,880畝の杭を基点として、法線および工事用道路幅を含めた $14 \times 186\text{m}$ の範囲内全域に第4図の如く設定した。

調査地点における遺物の分布状態は、E・F・G-71~76に集中している。他にはD-10, G-22, A-90, B-90 の4グリットから2~3片の土器片が出土したが、それ以外のグリットからは遺物遺構は検出されなかった。

遺跡の層序は基本的には3層に区分される。第Ⅰ層は畑・水田耕作により攪乱された有機質の黒褐色土で9~20cm、第Ⅱ層は黑色土で10~55cm、第Ⅲ層は黄褐色土漸移層で10cm前後の厚さを有し、黄褐色基盤層となる。全体的に土層堆積状況を見ると、第Ⅱ層黒色土の堆積が東南寄りで20cm前後の厚さをもつて対し、北西端では55cmの厚さがあり、段丘崖の低位に向うに従って厚い堆積状況を示している。

遺物を多く出土したE・F・G-71~76グリットでは前述の土層堆積は見られない。第5図に示したように5層に識別され、地表下約60cmで黄褐色の基盤層に達する。第Ⅰ層は耕作土で黒褐色をして12~15cm、第Ⅱ層は直径5~8cm大の砾を混入した黑色砂で、8~15cmの厚さを有し、G-76の畦部下で切れる間層である。第Ⅲ層は暗褐色土で10~25cm、第Ⅳ層は黑色土で8~15cmの厚さがあり、G-74・G-76に向って序々に厚く堆積している。第Ⅴ層は黄褐色土漸移層、そして黄褐色の基盤層となる。第Ⅳ層の黒色土は前述の第Ⅱ層に対応されることから、第Ⅱ層の砾混入黑色層は、水田造成の際の客土であると思われ、第Ⅱ層より弥生式土器と近世陶器片が混入して攪乱を受けている。したがって調査区域内には遺物包含原層とも言うべき包含層は存在していない。

(戸根与八郎)



第5図 城之古遺跡G-75~G-76セクション図  
I 黒褐色土層 II 砂混入黒色砂層  
IV 黒色土層 V 黄褐色土漸移層  
VI 黄褐色土層

### 第3節 出土遺物

#### 土 器

城之古遺跡出土の遺物は弥生式土器130片、土製紡錘車1点と陶器14片である。当遺跡出土の土器は出土量も微量で全体の器形を知ることのできる資料は検出されず、また水田の造成に際して運搬された客土の第二次堆積層中の出土である。そのため層位的把握、土器の組合せを掴むに至らなかった。また陶磁器片は日用雑器であり、器形別にみると碗・鉢・瓶・蓋などがあり、鉄釉・灰釉などを施したものと染付・無釉のものにわけられる。いずれも近年に肥料などと一緒に運び込まれたものであろう。

##### 甕形土器（図版第3図、図版第4図30～33、第6図1～3、第7図11～33）

甕形土器と判断される土器の多くは、炭化物が付着し、文様は櫛齒状工具により平行条線文・斜線文・刷毛目文・無文等に加わえて刺突文等が施される。

A類 1は櫛齒状工具による条線文を施す土器で、推定口径25.6cm、口縁部がゆるく外反し、焼成も良く、胎土中に長石粒を含み、褐色を呈す。口唇部より下は1cm幅を無文帶とし、幅2cmの櫛齒状施文具による横撫での11条からなる平行線文がその下にみられる。この平行線文は5・6条目が他と比較して太いところから、5～6条の櫛齒をもつ施文具で上から順に下部へ横位にくり返してつけられたものとおもわれる。また口縁部から頸部にかけて輪積み痕がみられる。

2の焼成は1に酷似し、器面に炭化物が付着する口径21cmと推定される口縁部である。外面は幅5条の櫛齒状工具で施文される条線が左から右上方向に引かれている。器面には幅約1.3cmの粘土紐を2段に積みあげた輪積み痕がみられる。

12は焼成堅緻でやや外反する口縁部で、口唇部にヘラ押による瘤と頸部に軽い刻目が1ヶ所施される。文様は2条の櫛齒の組合せによる2条+2条=4条を1単位とした条線文が左上から右下方に向ってみられる。また三ヶ月状の軽い刻目がある。

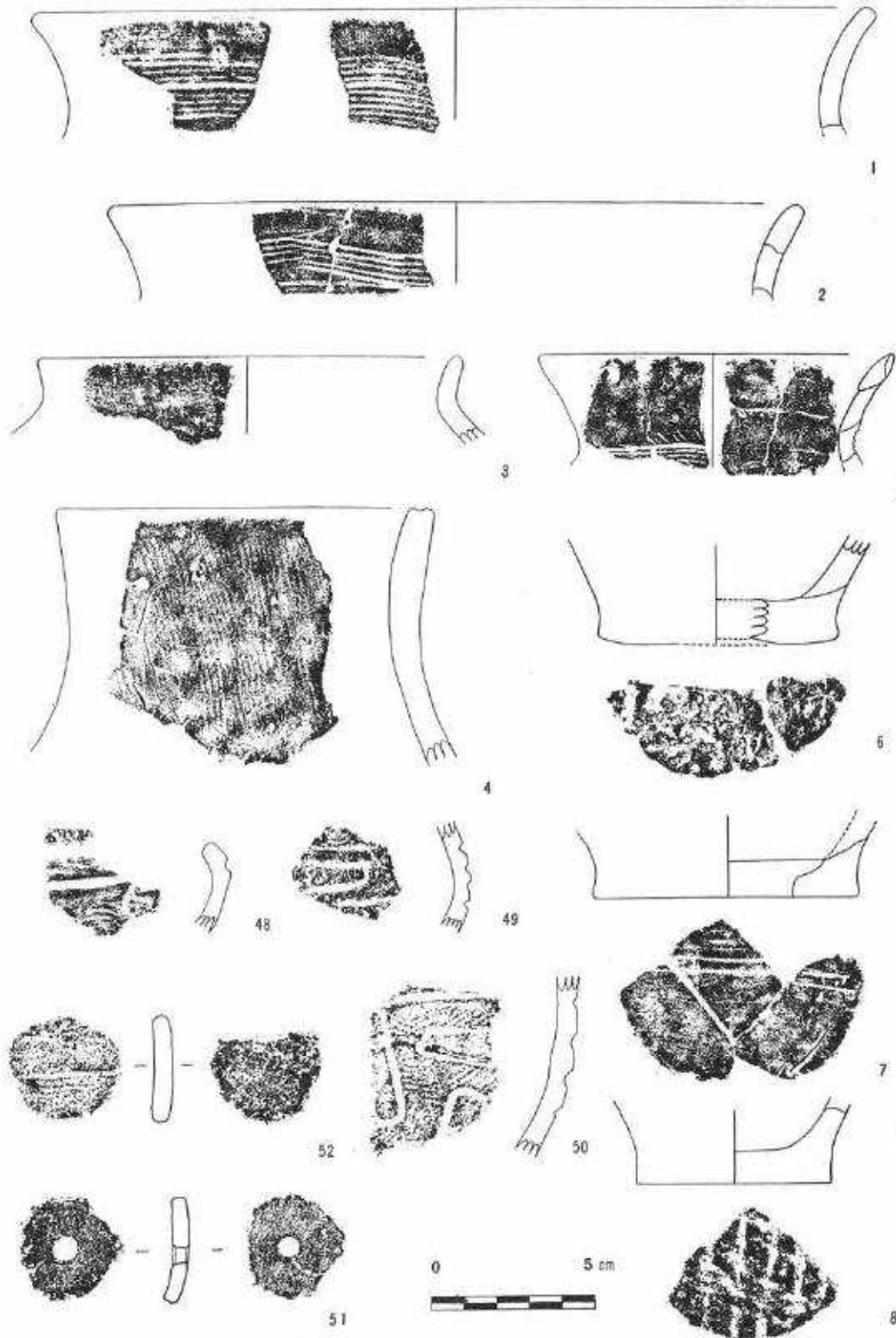
13は口縁部で赤褐色を呈し、8本からなる条線文が口唇部直下より斜位に施文する。

14は5条の条線文の施文された灰褐色の甕洞部である。内面は刷毛目整形され、表面には炭化物が付着する。

15は内面が横位のヘラ磨きで、外面は櫛齒状施文具を力強く施した条線7条が観察できる。

16は頸部破片で、焼成・施文・器厚共に1・2に酷似する。土器の断面には輪積み痕がよくみられ、粘土紐幅は約1.5cmである。

17は洞部の破片で、内面は横位の刷毛目で整形し、外面には斜位に条線が施される。外面には炭化物が付着する。



第6図 城之古遺跡出土の土器・土製品(32)

18は赤褐色で焼成堅緻な胴部上半の破片である。5条の条線を浅く施す。1・2・16の土器のグループである。

19は胴部であろう。色調は灰褐色で、幅1cm 6条の条線が施されている。

20は灰褐色を呈し内面は荒れており、そこには横位の輪積み接合面が線状によく残る。6条で幅1cmの櫛目条線による斜格子文がみられる。なお地文は刷毛目である。

B類 3は無文の口径12.7cmの赤褐色の土器で、火勢をあげて器面にはヒビ割れが生じ、器面は荒れている。頸部から短い口縁が「く」の字状に外反する土器である。

11は赤褐色を呈し、やや外反りの直行する素縁の壺の無文口縁部である。

C類 刺突文が施された土器で、21の器内面は横位に刷毛目整形し、輪積痕を残す胴部上半で器面に炭化物が付着する。外面地文は横位の刷毛目を施し、左下方向に斜行する櫛齒状工具の条線がみられ、その上から1.3cm間隔で刺突文が胴上半をめぐる。この刺突文は右下より刺上げているが、刺突文1単位は1列に連続する6個の小さい凹が観察され、施文具は櫛齒状工具の先端をしぼったものと推定される。

22は胴部破片で内外面共に刷毛目整形で、横位にヘラ或は棒状工具の先端による刺突文が3~4mm間隔で施される。

23は灰褐色の土器で、焼成・胎土共に良く、内外器面は刷毛目調整である。刷毛目の動きは内面は横位、外面は上から下に撫で、胴部の刺突文から下半部は横撫である。右下から三ヶ月状に施される刺突文は、幅約3mm、長さ約8mmである。

24は21と近似する刺突文のある胴部破片で、土器片の割れ口は、上・下端共に凹状を呈する輪積み接合面がみられる。幅1cm 4条を単位とする櫛齒状施文具による条線が右下に斜行し、その上に長さ5mmの米粒状の刺突文が7mm間隔で横位に付けられる。

D類 刷毛目文の土器群で、26は胴部と考えられ、器面は横位の刷毛目により整形し、外面には炭化物が付着する。

27は胴部下半の部分で焼成堅緻、外面は縦位の刷毛目整形で、内面はヘラ磨きである。

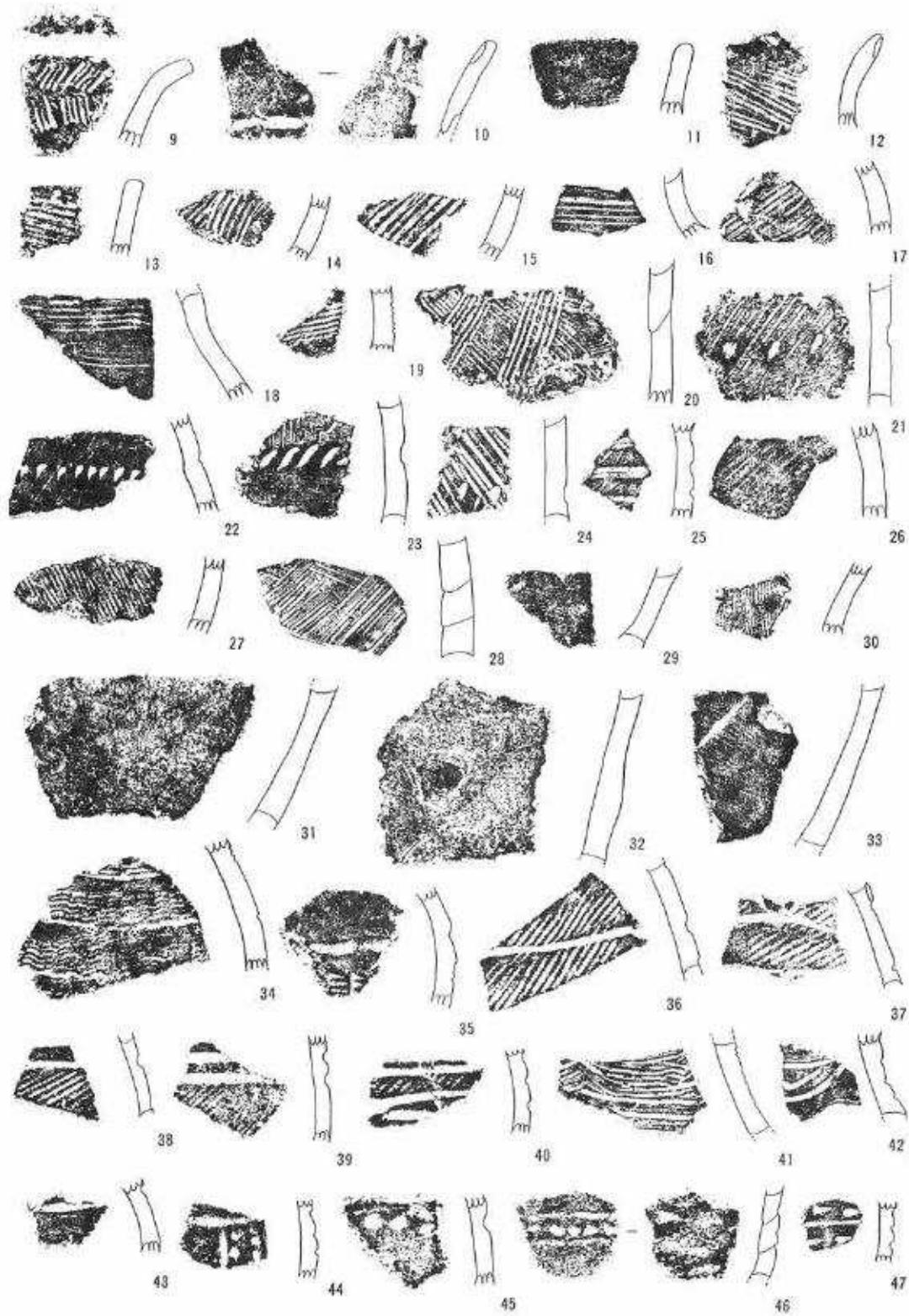
28は厚さ約1cmの肥厚な土器で焼成堅緻である。外面には幅1cmの刷毛目を綾杉状に施す。斜位の刷毛目整形で整えられた器内面には炭化物が付着する。また土器の作りは輪積み法で製作され、幅約1.5cmの粘土紐を3段に接合した輪積み痕が見られる。

29は炭化物が付着する胴部下半の破片で、上・下端の割れ口は輪積み痕がみられる。

30は器面内外共にきれいに整形された口縁部で外面は斜位、内面は綾杉状刷毛目がある。

31・32は同一個体の胴部中下半の破片で、内面は横位の刷毛目があり、外面は炭化物が著しい。

33は胴部破片で、外面は斜位の刷毛目上に炭化物が付着する。31~33の断面割れ口の上端



第7図 城之古遺跡出土の土器 (12)

及び下端部は輪積みによる土器作りの手順の状況をよく示している。

**壺形土器**（図版第3図4・5・9・10・25、図版第4図34～47、第6図4・5・48～50、第7図9・10・25・34～47）

**A類** 4は口径約11cmの壺の口縁で、胎土に長石粒を含む。外面は縦方向の刷毛目で整形し、平坦な口唇部は浅い凹みが走る。口縁が直立し胴が大きく張る壺は、長野県恒川遺跡出土の図6の5の無文壺形土器に近似している（長野県考古学会 1968）。

**B類** 5は口径約11cm頸部から強く「く」の字に外反する口縁部で黒褐色の薄手土器である。口唇部は5～6mm間隔のゆるい波状らしく、丁度人差指を内側にそえて親指で器外面口唇部を内側にむけて押上げられたようである。頸部には4条以上の櫛目平行直線文帯が回摺するが、口唇部と頸部間は無文である。

**C類** 9は角張る口唇部で鋸歯状の刻目があり、強く「く」の字に外反する。口縁内面は5条を一単位とし、幅約1cmの櫛歯状工具を口唇より1段目のものを左傾させ、2段目を右傾させて長さ1.5cm程引いて羽状文を描画する。角張る口唇には沈刻の正三角形状の山形に連続させた鋸歯状文がみられる。

10は赤褐色で口縁は「く」の字に外反する。無文であるが口縁内面に長さ1cmのヘラ状工具による半月状の刺突が器面にはほぼ垂直に押捺されたものである。頸部と口縁部の接合する部分は粘土組による作りをよく残して剥離しており、その輪積み整形を理解できる。

**D類** 櫛目を施文した土器で、当遺跡では52の円盤状土製品を含む3点がある。斜位平行短線文や丁字状文等はみられず、牛ヶ首遺跡（稻岡嘉彰 1972）に比較してその出土量も少ない。

34は胴部破片で外面に炭化物が付着する。文様は櫛歯状原体による条線を施し、その下は約9mm幅の無文帯、そして幅約1cmで6条の櫛歯状原体でゆるい波状櫛目文を施す。次の文様帯とは幅約5mmの直線で区切り、同様の無文・波状とくり返す。

35は赤褐色の胴部破片で、いわゆる籠状文の土器である。無文地にヘラ状工具による直線文で区切り、その下部を5mmの無文帯を残して3条の櫛歯工具で文様帯をなす。

**E類** 比較的太目の沈線文と繩文や刺突文が組合わされるもので、36～38は赤褐色で胎土はしまり焼成良好で地文の繩文はLRである。36は頸部から胴上半部の破片で厚さ5mm、破片の割れ口に輪積み痕をのこす。下部は横位のヘラ描きの断面がU字状をなす沈線で、その凹みにそって丁度輪積みの接合部分から割れている。上下3本の沈線間は2段の山形沈線の文様帯をなすと思われる。37・38は器厚は3mmで薄く文様は基本的に36と同じ。

39は器厚4mm、灰褐色で器内外面共に火勢を帶び、特に内面の荒れが著しい。2条の棒状

工具による沈線文で以下は縦文である。

40は胸部で、ゆるく彎曲する部分である。沈線で区切られる縦文帯は7mm幅である。文様は一見変形工字文風であり、内面は横位のヘラ整形である。

41は頸部破片で、沈線文間に平行条線文が横走する。6条程からなる平行条線を左から右に逆の弧文状に描き上げる。土器の左上部に施文具の描き終りの静止と描始めの施文動作がよく示される。その下は3mmの間隔をおいて、2条の直線文がめぐり、そこには刷毛目整形の痕をのこしている。

25・42・43は太幅のヘラ描沈線文土器である。25は刷毛目整形を施した上に2条の沈線を単位とした沈線文がみられる。

44~47は刺突文の加わる土器である。44は工字状に区切った中に刺突を5点施文する。施文は径3mmの円形の棒状工具の先端を器面に対して直角に押捺する。

45は指頭押捺の凹みが横位に連続し、その間隔は約5mmである。

46は約1cm幅で2本の沈線が平行し、その間に連続する刺突文を施す。器面は火勢を帯び赤灰色であるが、その器内面は1cm幅の粘土紐の輪積み痕が線状に残り、その接合面は指で撫で下し整形をしたことが明瞭に観察できる。

47は1cm幅の沈線で区画する上下にそれぞれ2点づつの三角形状の刺突を施す。44がステップ状に押されるのに対して、46と47は棒状工具を右から左方向へ押して連続施文している。

48は平縁の口唇部で内彎する。口唇には縦文を施すが原体は判別できない。口縁の約8mmの無文帯の下に沈線を施す。器面には刷毛目整形時の擦痕がのこる。器形は鉢形あるいは無頸壺ではないかと考えられる。

49は土器が風化しているが文様帯は幅2cm、上下をそれぞれの沈線で区画し、その中を「コ」の字状に描出する。文様帯外の下部には長さの斜列点文が2ヶ所2mm間隔で施文される。これは桐原健の言う流水文化した工字文の範疇に入るものであろう。(桐原 1963)

50は沈線による変形工字文に摩消手法をみる胸部破片で、縦文でその回転方向は規則性を欠き、縦文原体は比較的短い。その沈線で区切られる幅は約8mm、内面は縦文を磨消している。須坂園芸高校遺跡出土の底部に網代痕を有す円筒土器の胸部文様に類似するが(神村透 1969)、縦文と無文の施文部分はそれとは逆である。

底部(図版第三図6~8、第6図6~8)

6は底径7.3cm、肥厚部1.2cmで刷毛目整形である。底面は凹凸の著しいもので、底部からの立ち上がりの最下部は器面上部から下部にかけて縦方向へ整形したヘラそぎによる土溜がある。断面には7と同様の輪積み整形がみられる。

7・8は底面に対してほぼ垂直に基部が立ち上がり、外反しながら胸部の最張部につづく

もので共に平底である。8は底径6cmで、幅1cm四方に継ぎられた網代痕がみられる。

7は底部径8cm、底面には4mm間隔に3条の沈線圧痕が付され、底部中央は円板状に剥離している。このことから土器製作の手順はまず最初に高さ1.8cm、幅2cmの粘土で底の外部をドーナツ状に作る。次にその空間に厚さ1.2cm、径6cm程の粘土を充填する。こうして出来上がった底部の基部に2・5・10・20・28等でみた如く胴部・頸部・口縁部と輪積み法による接合で土器が形成されると考えられる。

### 土 製 品

51は無文で径3cm強、中央には径5mmの孔が器内側から外側に焼成後に穿たれている。孔の径は内側が外側より広く臼形である。土器片を利用したもので紡錘車であろうか。

本例とは別品の径約4cmの紡錘車が以前本遺跡より出土している。(中川成夫他 1958)

52は直径3cm、厚さ約6mmで条数5本の横目文が施された土器片の周囲を研磨整形した円盤状のもので所謂メソコと称される円盤状土製品である。

### 石 器

石鎚(図版第4図1~6、第8図1~6) 1は現長4.2cm厚さ7mmで最大幅1.5cmの安山岩剥片からつくり出された石鎚で基部を欠く。2は現長2.7cm最大厚3mmで基部・先端を欠く安山岩質の有茎鎚である。剥片を利用し、周囲から押圧剥離で調整されている。3も安山岩質で現長2.7cm厚さ3mm、幅1.2cmで裏面は剥離面を残す有茎鎚である。4・5は硬質頁岩である。4は最大幅8mm厚さ4mmで刃部は押圧剥離による調整がなされ、両端部分を欠き、断面は菱形を呈す。5は長さ1.8cm厚さ3mmの断面三角形状で剥片鎚の裏面には第1次剥離面を残す。表面は稜線の左右両側のみ刃部加工がなされる。6は最大幅約1cm長さ1.3cm厚さ1.5mmの白色透明の黒耀石質の基部を欠いた鎚である。

玉類(図版第4図7~19、第8図7~14) 7~9は灰緑色の碧玉とも考えられる石質の細形管玉である。7は長さ1.2cm直径2.5mmで研磨途中のものである。表面は幅が不規則で、約10面の多面体を呈す。穿孔は片側から行なわれ、孔径(1.5mm)、反対側の孔径は1mmである。

8は長さ5mm直径2mmの表面がなめらかに研磨された完成品。片面穿孔でなされ、孔径は1.3mm中心孔0.8mmである。

9は長さ約1cmの太形の管玉で上端には穿孔時につけられた微細な回転条痕がみられる。穿孔途中で割れたと考えられる。

10は暗緑色のやや硬質な石材を利用した白玉の未成品で、厚さ1.3mm、5~6本の棱線を残し、臼玉形に整形途中のものであり、表面には研磨中の擦痕を観察できる。

11は半透明暗緑色に乳白色の混る石材で橢円状を呈する玉である。約8×6mmの自然小砾

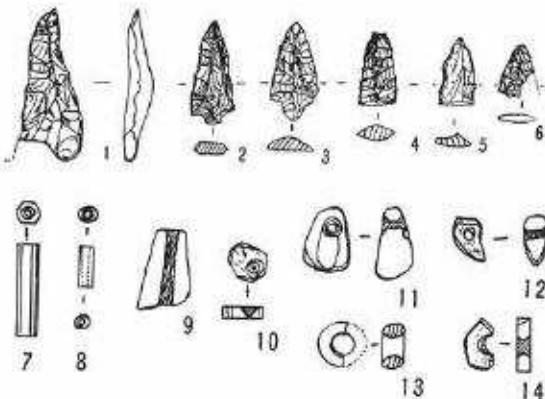
を磨いて加工しており、現在約7面体を呈す。両面からの穿孔で孔径2.5mmで、中心の貫入孔径は1.2mmである。

12は10・14と同じ石質を用い、両面穿孔で孔径は1.3mm、一方はやや斜めの角度から穿孔される。厚さは2.5mmで両面は殆んど扁平に近く研磨され、勾玉とは異質なものではあるが、形態はそれに近い形状をしている。

13は7・8と同じ石質で臼玉の割れたものである。両面からの穿孔で孔径は約3mmである。玉の両面は平らに研磨されている。

14は幅2.5mmで厚さ1.2mm、周縁部を臼玉状に形割して整形し表面には仕上げ中の研磨擦痕が観察できるが、裏面は原石のままである。おそらく穿孔途中で割れたものであろう。

15~19は暗緑色の軟質な石材である。15は小指大の石塊で乳白色の石英質が混じる。断面は半円形を呈し、表面は2本の稜線が軽く残され、綾杉状の微細な擦痕が観察できる。おそらく加工工程の途中であろう。16~19は原石からの打削石片で加工痕はみられない。



第8図 城之古遺跡出土の石器(14) 玉(13)

(稻岡嘉彰)

## 第Ⅳ章 川治百塚第6号塚

### 第1節 川治百塚について

本調査の対象となった川治百塚第6号塚が所在するこの地は「百塚」と呼ばれる塚群が存在した。中魚沼郡誌に「高山の百塚」の名称をもじいて「川治村高山地内河内川（川治川）両岸の耕地を塚下と言い、稍高崖上の平地と共に塚原と称す。塚多くありて俗に百塚と呼ぶ。今概ね鋤き返して耕地となせるも猶存せるもの一・二に止まらず。その剝削の際、往々腐蝕せる刀類、白骨等を出せり」とあり、また同書の塚原觀音堂の項では「此の附近塚多し塚原の称の因て起る所なり。今多く毀たれて耕地となれり」と記載がある。

このたびの発掘調査の際におこなった塚の確認結果では、羽根川から川治川までの信濃川第2段丘面上に現存するものは9基、地元住民が過去の記憶のなかで確実に残るものが10基がある（第3図）。川治川を北に越えた高山地内でも塚が存在したことが聞込の結果わかり、特に新潟県立十日町実業高等学校附近に多く分布したとのことであったが、現在この地には一基もその姿をみることができない。

「百塚」の名称は確認された若干20基程度の塚群につけられた名称とは思われない。第6号塚のある大字北新田字西浦イ号の地域のみでも大正時代には20基はあったと地元の古老は言っており、同時に大字城之古・北新田・高山の三部落の地域には塚原なる小字名がみられ、塚原を貫通する農道を塚原道と呼んでおり、また北新田には狐塚、隣接する川治地内にも塚田・狐塚の小字名があることからしてかっては朝日百塚（中村孝三郎 1970）の如く100基をはるかに越える塚が存在したであろうことが推定される。

百塚の所在についてみると、中魚沼郡誌では「高山の百塚」と呼び、高山地内に存在した塚群の呼称のようであり、またこの「百塚」には城之古の塚は入っていないようである。先述の如く、この地域での塚の分布は城之古・北新田・高山に確認され、高山地内にのみ限定されてはいない。そのうえ地元住民の間にあっても「百塚」といった場合、高山地域を指すこともあるが、多説があって一定地域を指してはいない。最も多い地元民の説は、本調査の第6号塚を中心とした北新田字西浦イ号一帯の塚群を指して言う場合である。したがって「百塚」とは西浦イ号地域を中心にした羽根川と川治川とに挟まれた大字城之古・北新田・高山の信濃川第2段丘面に散在した塚群の総称として理解されるのである。それ故に郡誌の言う「高山の百塚」の名称は妥当なものとは考えられないで、城之古・高山・北新田・川治の地域を示す名称である旧村名をとって「川治百塚」と呼ぶことにした。

現存・既存をあわせて確認された塚は19基で、次の如くである。(第3図)

第1号塚 十日町市大字北新田字森上イ号222番地にあり、通称「大塚」と呼ばれており、古くは百塚中で最大規模の塚であったという。現在は塚の周端が削平されて三角形を呈しており、東西約10m、南北約8m、高さ1.5mである。現状から旧形は知り得ないが、地元住民の話を総合すれば直径15m、高さ3m程の円形塚であったらしい。盛土は黒色土のみで仏像が出土したとも聞く。現在墳頂には高さ35cmの自然石に「大塚大神 大正四年 □沢長五郎」と刻まれた石碑が立つ。

第2号塚 大字城之古字上塚原606番地の段丘崖直上にあり、直径約3m、高さ約1.5mの円形塚である。

第3号塚 大字城之古字上塚原607番地の崖上にある。かつて墳頂に諏訪社(石祠)があったことから、本塚は「オシナサマ」あるいは「オスワサマ」と呼ばれており、直径13m高さ2.5mの円形塚である。墳頂に祠を安置した際の石組基壇がみられるが、塚の保存はよい。

第4号塚 北新田字西浦イ号にあったが、宅地化により現存しない。直径5m、高さ2mの円形塚であったらしい。破壊の際には遺物は発見されず、黒土の盛土であった。

第5号塚 西浦イ号にあったが宅地造成のため破壊。直径9m高さ3mの円形塚で黒土の盛土であって、遺物はなかったと聞く。

第6号塚 本調査の対象の塚で、北新田字西浦369番地にある方形塚である。

第7号塚 西浦イ号にあって現直径8m、高さ1mで塚上には建坪1坪程の俗に「津右エ門稻荷」または「岡村稻荷」と呼ばれる「農受稻荷」社があり、毎年3月下旬に祭礼を行なう。以前この塚の鶴部から腐蝕した刀が出土したという。(図版第12図1)

第8号塚 西浦イ号の地にあり、俗に馬塚と呼ばれていたが破壊されて現存しない。直径6m、高さ2m程の円形塚であったらしく、刀の出土を伝えている。

第9号塚 西浦イ号にある。東西15m、南北12m、高さ1.5mの方形塚で上面は礫のみである。本塚は水田への引水のため横井戸を掘ったときの堆土を積上げたものであろうといわれており、礫の厚い堆積は他の塚と様相を異にしており、塚とは断定できない。

第10号塚 西浦イ号の地にあったが道路開削に際して破壊された。直径12m、高さ1.5m程度の黒土を盛った円形塚で、本塚出土の和鏡を地主の秋山満次郎が所蔵している(第9図)。

第11号塚 北新田字道ノ根にあったが、近年工場団地の造成工事のために削平破壊されてしまった。直径15m、高さ2mの円形塚で、本塚群の中で第1号塚(大塚)、第6号塚と共に三大塚といわれ、最大級のものであった。本塚は通称「御行場」と呼ばれ、行人塚の伝承がある。また虫送りとも関係があり、大正末年まで村中の稻虫送りの最終地点であった。盛土は黒色土で、破壊に際しては遺物・木炭・人骨等は全く検出されなかつた。

第12号塚 北新田字大久保にあり、高さ1m程の盛土が東西に細長くみられる。地元住民は塚であろうといふ。

第13号塚 城之古字原口号、現在は旧状を留めずわずかな盛り上がりがみられる。旧形は直径10m、高さ2mの円形塚といい、黒色土で遺物はなかったとのことである。

第14号塚 城之古字原口号にあった。現在はほとんど全壊の状態でわずかな盛上りをみる。元来直径10m、高さ2mの円形塚であったらしい。地主の高橋清五郎が畠地化するため塚を崩したとき、塚のまわりに石があり、封土内から古錢と須恵の大甕、多量の木炭が出土したことである。

第15号塚 城之古字原口号にあったが、工場団地造営のために破壊されて現存しない。直径8m、高さ2m前後の円形塚であったが、遺物はなかった。

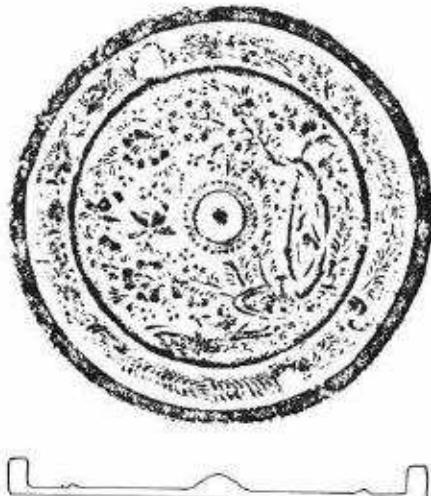
第16号塚 城之古字原口号にあり、墳丘残痕を残すが、旧形を明らかにするほどではない。地主の話では円形塚であったらしく、直径8m、高さ2m前後の規模のものである。塚を崩したときに多量の木炭が出土した。

第17号塚 城之古字上塚原の畠中に存在する直径2m、高さ1mの小円形塚であるが塚か開墾塚かは明確に判断できない。

第18号塚 第6号から西に約10mに櫛の古木があって、昭和4年にこの古木を切り倒したところ根元から火葬人骨が多量に出土したという。その当時、波間常二が立ち合い人骨の一部を鑑定するために持ち帰ったとのことである。本塚は当時すでに封土がなかったらしく、また骨蔵器等の遺物はなかったという。

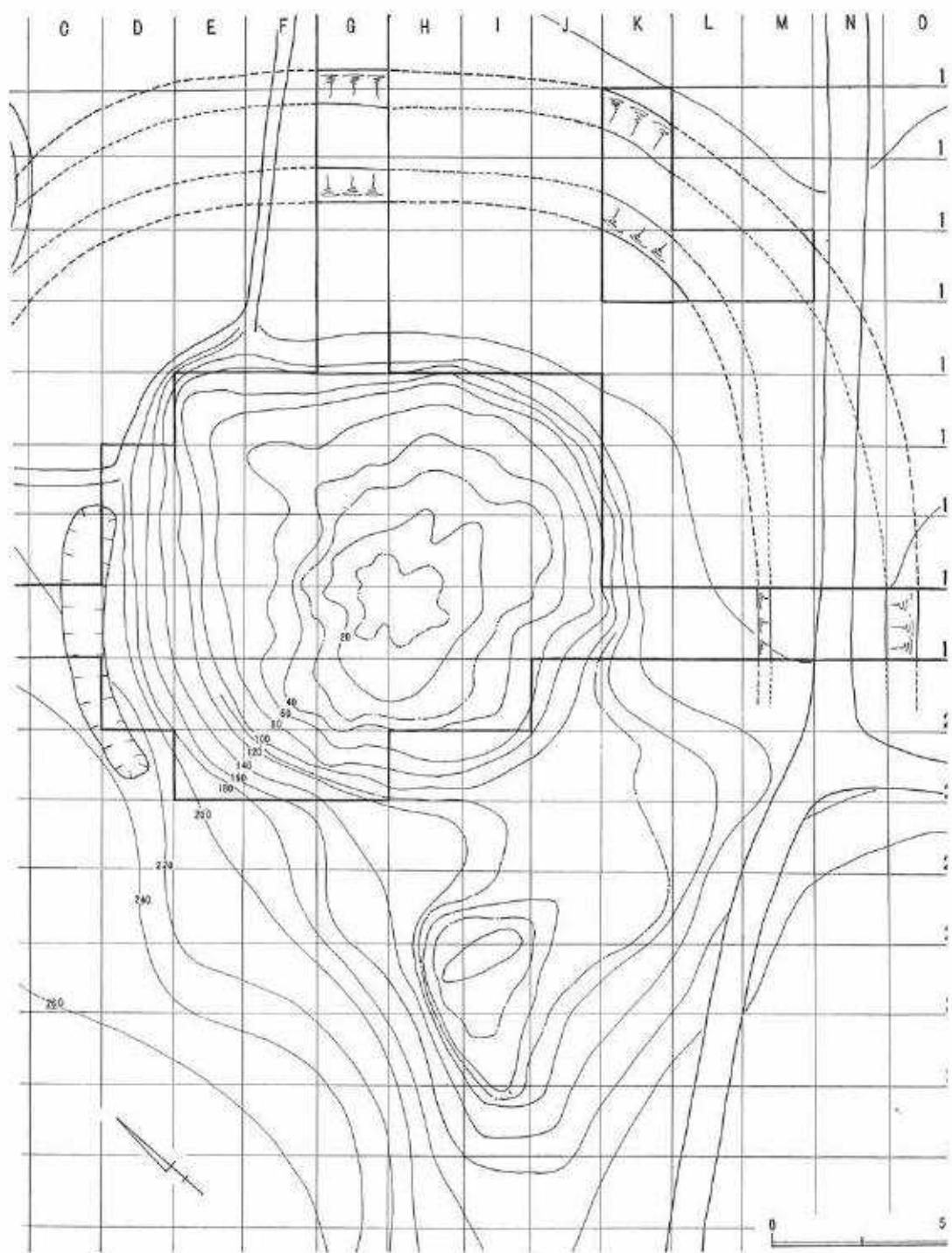
第19号塚 北新田字西浦口号にあって、高さ2m、長径8m、短径5m程の塚状をなし、塚上に礫が多くみられ、また梢円形状を呈して盛土や形状は、他のものと様相を異にしている。横井戸の排土ではないかと地元では言っている。(図版第12図2)

川治百塚の塚群が現在確認されたのは以上19基であるが、現存するものは9基のみであって年々調査されることもなく破壊されてきたことは誠に残念である。元来、川治百塚の塚は100基あるいは200基以上も存在していたのであろうが、現在その数を確認することはできず、またその配列や組合せについても何ら知りうる手段はない。



第9図 川治百塚第10号塚出土の和鏡(12)

(金子拓男)



第10図 川治百塚第6号塚実測図

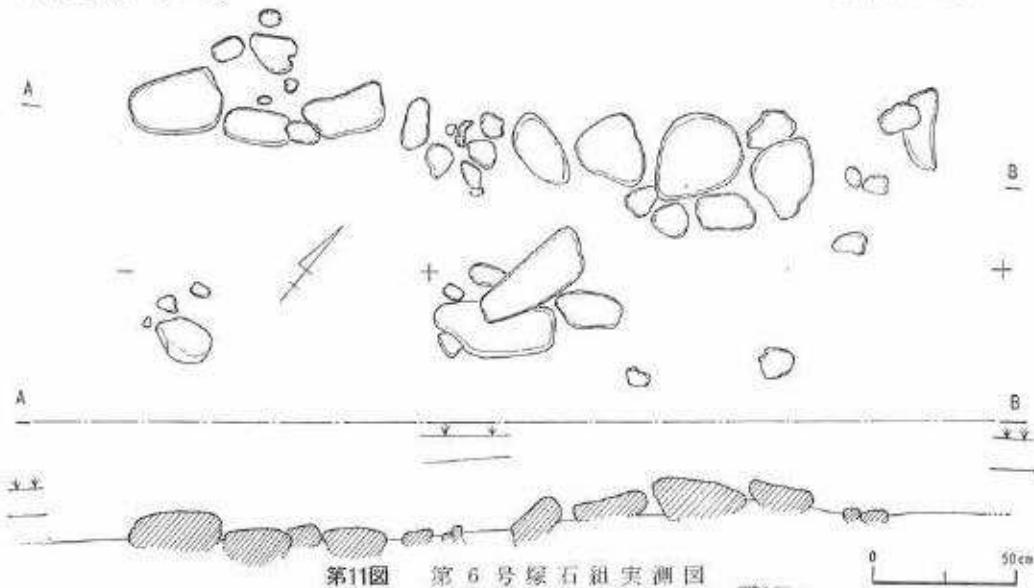
## 第2節 第6号塚とグリットの設定

川治百塚第6号塚の発掘にあたり第10図の如くの $2 \times 2\text{m}$ を基本区画としてグリットを設定した。第6号塚の現状規模は、東南部に隣接して墳丘状のものが見られ、その境界は明らかではないが長軸 $14.5\text{m}$ 、短軸 $13\text{m}$ 、高さは墳丘裾部の東南水田面より $1.2\text{m}$ を測る墳頂方錐形の墳形を呈している(図版第5・6図、第10図)。墳丘の主軸はN $50^{\circ}\text{E}$ を測り、その傾斜角度は全体的に緩かで約 $30^{\circ}$ を示す程度である。墳頂部には一辺 $4\text{m}$ 前後の平坦面を有し、一部礫の露出が見られた。墳丘上には杉が全城にわたって植林され、北側の裾部で最近の土盛痕が、東側で溝が掘られている以外はこれといった変形は認められず、墳丘築成時の原形をよく留めているものと思われた。

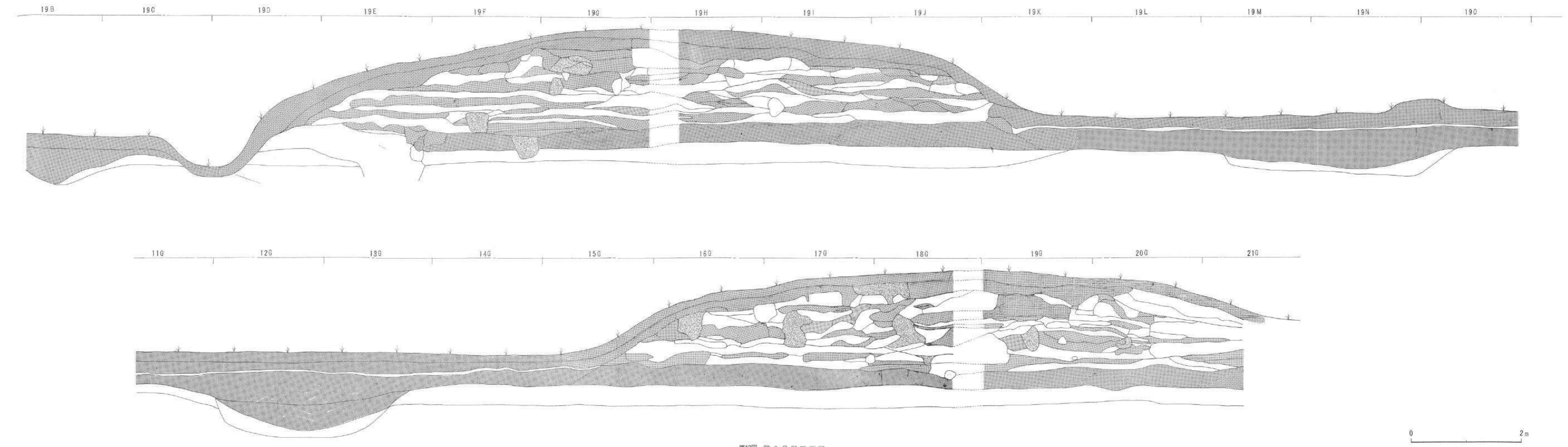
外部施設としての周溝は、墳丘裾部より約 $2.5\text{m} \sim 3\text{m}$ 離れた $11\text{G} \sim 13\text{G}$ ,  $12\text{K} \sim 14\text{K}$ ,  $14\text{L} \sim 14\text{M}$ ,  $19\text{M} \sim 19\text{O}$ でその一部を確認したにすぎない(図版第9図)。平面形態は $12\text{K} \sim 14\text{K}$ に確認されたコーナーから考えると、長方形を呈すものと考えられるが一周しているのか否かは不明である。周溝の幅は $3.5 \sim 4\text{m}$ を測るが、その断面は北側でU字形を呈し、黄褐色粘土層への掘り込みが $0.8\text{m}$ を測るのに対し、東側、西側ではU字形からさらにくずれて溝底が平坦となり掘り込みも $0.2 \sim 0.4\text{m}$ を測り一樣ではない。溝中には褐色土、黒褐色土がレンズ状に充満していたが、遺物は一点も検出されなかった。なお、周溝の深さは墳丘下の黒色土層が往時の地表面であるとすれば、その分だけ周溝は深かったということになる。

この周溝は古墳などに見られる周溝とは少々趣を異にし、幅に比して浅くゆるやかな傾斜角度を有している。

(戸根与八郎)



第11図 第6号塚石組実測図



第12图 第6号煤断面图

### 第3節 内部構造

川治百塚第6号塚の構築状態は図版第7図・第12図に見られる様に根による攪乱以外は、墳丘構築時の状態で盛土がよく残存している。構築に際しては、往時の地表面を削平するなどの整地作業の痕跡は認められず、往時の地表面上に直接土盛したものである。

墳丘下の基盤層は盛土の下部全面に三層にわたって見られる土層で、一定の厚さ、同一レベルを有してほぼ水平に墳丘の外側まで続いている。この土層はこの附近一帯の基本的層序と考えられ、堆積の差こそあれ城之古遺跡にも見られる。最下層に見られる土層は、比較的粘性のない黄褐色粘土層で0.5~0.7mの厚さを有し、この下は礫混入の黄褐色粘土層となる。黄褐色粘土層上には0.3~0.4mの厚さを有する黄褐色粘土層の漸移層が、更にこの上に構築時の地表面と考えられる有機質腐蝕黑色土が0.3~0.5mの厚さで堆積している。

墳丘を形成する盛土の主要なものは、有機質の分解によって生じた黒色土、黄褐色粘土が腐蝕土と混じて汚れた黒褐色土・暗褐色土と地山に供給源が求められる黄褐色粘土などである。これらの土を規則的に盛ったとは言いがたく、少なくとも二段階にわたって中央部より魚鱗状に土塊を盛り、所謂水平段状積みはなされていない。更にこれ等の土盛を包み込む様にして黒褐色土層が0.1~0.3mの厚さで、その上に表土（暗褐色土層）が積み込まれて6号塚の墳丘が構築されている。盛土の状態は、全体的に軟質であり、特に表土およびその下の黒褐色土層は軟弱である。

主体部と考えられる礫群は、墳丘中央部の18G・19Gの黒褐色土層上面で検出された（図版第8図・第11図）。主軸はN50°Eを指し、塚の長軸方向に一致し全長2.8mにわたって一列に配石されている。配石の状態は全体的に粗雑であり、北東部は南西部に比して粗雑かつ不揃いである。用石は大形のもので長径30~40cm、小形のもので10cm前後をはかり、角丸のものが多く河原の転石を利用したものと思われる。石質は花崗岩・安山岩質のものである。配石の掘り込みは確認できなかった。また木炭片、骨片、焼土塊すら検出されず、配石の周辺部より刀子が一点出土したのみである。

この一列に並べられた配石が、この塚の主体部と考えてよいものとしても、これ自体が營塚の目的のために構築されたものか、あるいは營塚後二次的理由によって構築されたものか否かは不明である。礫の配石状態から見てみると、古墳の石室、経塚、火葬墓などの埋葬施設とは規模・形態を異にしており、また副葬品に類する遺物も皆無で埋葬施設とは考えられない。更に土層が軟弱であることなどからこの遺構が新しいものかも知れない。

(戸根与八郎)

## 第4節 出土遺物

本塚より出土した遺物は、縄文式土器・土師器・陶磁器などの土器類と鉄製品・石製品であり、縄文式土器2片・土師器18片・陶磁器13片を数えるのみである。

### 縄文式土器（図版第11図1～2）

旧地表面と考えられる黒色土中より出土したものである。器面には縄文が施されているが、風化が著しく縄文原体の方向などは明確ではない。縄文時代の中期頃のものであろう。

### 土師器（図版第11図3～8、第13図1～6）

表土およびその下の黒褐色土層上面より出土したもの（図版第10図3）。細片となっているものが多く、全体の器形を窺えるものは一点もない。器種は壺形土器、高壺形土器の二種がある。

壺形土器（1）肩部から頸部にかけての破片で、全体の器形は推定し得ないが、小形丸底壺とも考えられる。胎土に細砂が混入され、器面は箒で丁寧に研磨されて仕上げられている。断面には輪積痕が顕著に認められる。

高壺形土器（2～4）壺部と脚部に分けられ、2は壺部の破片である。口縁が若干外反するもので、内外面ともに箒で研磨され、光沢を持っている。3は口縁部が大きく外反しながら開き、杯底部との境に段をめぐらす壺部破片であり、段部に接合痕を残している。器面には横ナデ整形が施され、2と共に胎土に石英・雲母を含む細粒が混入され、色調は黄橙色を呈している。4は円筒状の脚の裾部が大きく聞く脚部破片である。器面には箒による継位の研磨整形が施され、脚部内面には輪積痕が見られる。

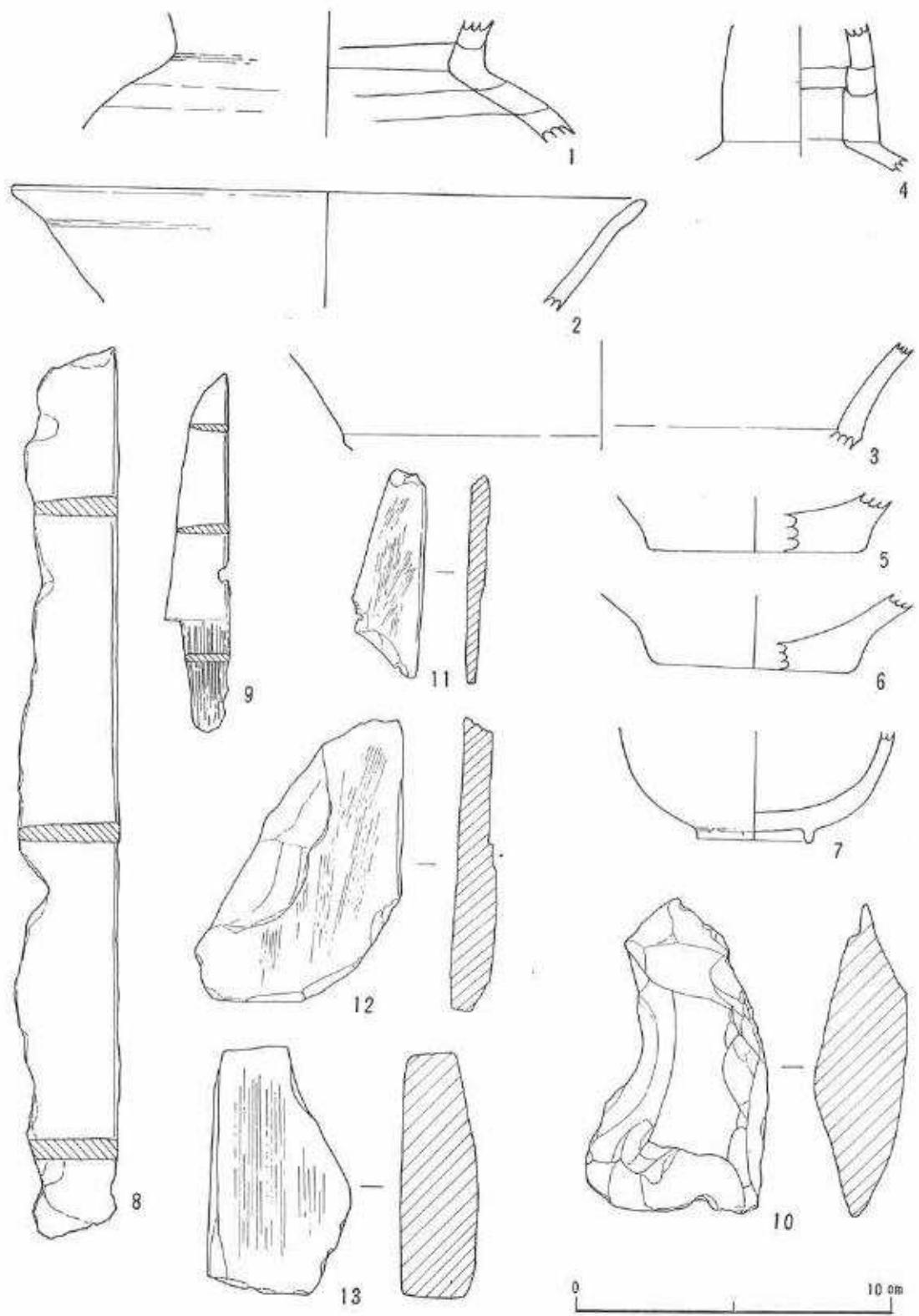
土器底部（5～6）壺もしくは壺形土器の底部である。底部から胴部下半に向って大きく聞く土器で、胎土には砂粒が混入され、器面は箒で研磨整形されている。

これらの土師器はセットとして把握はされないが、新潟県内出土の土師器資料と比較・検討してみると、その時代は古墳時代初期のものと推定され、田伏I式土器（関雅之 1972）の範疇において把握されるものであり、関東地方の土師器編年で和泉II式と称せられている一群に近似するものであろう。

### 陶磁器（図版第11図9～16、第13図7）

表土から大部分出土したもので、中にはその下の黒褐色土層中より出土したものもある。陶磁器は全て近世の日用雑器で、種類別にみると鉄釉、灰釉などを施した陶磁器と染付、無釉のものに別けられ、器形からは碗・甌・徳利・摺鉢・捏鉢に分類できる。

第13図7、図版第11図9～12は染付の碗形土器で、器面に草花絵文様が描かれている。胎土は精選され、素地は白灰色を呈している。9には細かい貫入が見られ、器面は全体的にく



第13圖 第6號墓出土遺物分布圖

すみ、灰黄色をしている。13は徳利の破片で、器面には黒茶色の釉薬が施され、素地は黒褐色を呈している。14は甕形土器の口縁部破片で、口縁部は肥厚して折り曲げられ玉縁状をしている。器面には茶褐色の釉薬の上に白土で波状文様が描かれ、素地は赤褐色をし、胎土に細粒を含んでいる。15は捏鉢の底部破片で、赤褐色の素地に白土をかけ、櫛目状工具で波形文様を描き出したものである。この捏鉢と同手法のものは、県内では西蒲原郡黒崎町大墓遺跡より出土している（戸根与八郎 1973）。16は摺鉢の底部破片で、おろし目の平均的幅は3～4mmを測り、底部よりかき上げたものである。おろし目は磨滅して浅くなっている。

これらの陶磁器は、ほとんど九州産のものと思われ、その年代は江戸時代の元禄期前後のものと推定される。

#### 鉄 製 品（図版第11図17～20、第13図8・9）

刀・刀子・鎌・蹄鉄などがあり、刀は墳頂下0.63mを測る盛土内より水平状態で出土し（図版第10図1・4）。刀子は表土下の黒褐色土層上面の配石附近より出土したものである（図版第10図2）。また、鎌・蹄鉄は墳丘の地表面より採集したものである。

刀（8） 平棟平造りの直刀の刀身の一部と思われ、現長27.5cm、身幅3.2cm、背幅0.7cmを測り、刃部の大部分は欠失している。全面に発錆が見られる。

刀子（9） 棟の一部を欠いているが、全長11.2cm、茎の長さ3.5cmを測る平棟平造りの刀子である。身幅は先に行くに従って細くなり中央部で幅1.6cmを測る。身と茎の間には闊を持ち、茎の断面は角味をおびている。そして茎部には、木部の痕跡が鉄錆として残っており、着柄の状態をよく示している。目鉤は付されてはいない。

19の鎌、20の蹄鉄は近年のものであり、極く最近に捨てられたものであろう。

#### 石 製 品（図版第11図21～24、第13図10～13）

打製石斧と砥石があり、打製石斧は墳頂下0.45mの盛土内より、砥石は表土およびその下の黒褐色土層中より出土したものである。

打製石斧（10） 貫岩製のバチ形石斧である。片面に自然面を一部残して第一次剥離面を大きく残し、全体的にラフな造りである。繩文式土器と同時期くらいのものと思われる。

砥石（11～13） 13は断面が四角形を呈し、三面に磨面を残している。11・12は不整三角形の砥石の一部かとも考えられ、11は二面に、12は四面に磨面を残している。共に石質は凝灰岩質のものであり、手持の仕上げ砥石であろう。

（戸根与八郎）

## 第V章 考 察

### 第1節 城之古遺跡の弥生式土器について

中魚沼地方の弥生式土器については第Ⅲ章第1節に記述したが、北信濃における千曲川水系の弥生文化の影響あるいは流入伝播の結果としての把握が今日までなされてきた。土器のみならず牛ヶ首遺跡の如く扁平片刃磨製石斧の存在もまた北信濃の弥生文化と繋がりを示す有力な資料である（稻岡嘉彰 1972）。

城之古遺跡においても壺形土器のE類36・37・38・42等は百瀬式土器の頸部に（信濃史料調査会 1956）、栗林第2・3類土器（桐原健 1963）、あるいは天王垣外式土器胴部にみられるモチーフに共通し（長野県考古学会 1968）、施文技法や器面文様が原則的に一致するところが多くみられ、北信濃の弥生文化との繋がりが把握される。

壺形土器G類9の土器片は、強く外脅する口縁の内面に平行短線による羽状文がみられるものであるが、これは石川県の小松式土器（橋本澄夫 1968）や佐渡の竹の花式土器（小出義治 1955）の最も顕著なモチーフの一つである。しかし、小松式土器や竹の花式土器の羽状文は櫛歯状工具を器面に垂直におとす刺突文で、口唇部から左傾・右傾・左傾するとの順で3段の刺突によって羽状文が構成されている。本例は櫛歯状工具を横方向に押ながら移動して施文する平行短線文によって描出されており、文様の効果としては同一性をもつが、施文方法においては異なる。

この斜行する平行短線文は、小松式土器や竹の花式土器の壺形土器胴部上半で平行線文と併用して用いられ、また口縁内面には一定方向で数段に施文されたものも存在する。長野県の北原遺跡（神村透 1972）にもみられるが、ここでは口縁外面に横位一列に、胴部上半の沈線で区画された空間に施され、平行線文と併用される場合もある。いずれにしても信濃では口縁内面に平行短線文は使用された例は知見していない。

本例に近い技法のものとしては、石川県の次場遺跡出土の土器に（刺突+刺突+平行短線文）で羽状文をなす例があり（橋本澄夫 1968）、佐渡の桂林遺跡の甕形土器に（右傾平行短線文+左傾平行短線文）の例があり（中川成夫他 1964）本例にきわめて酷似している。

口縁内面に施される羽状文は小松式土器や竹の花式土器に代表される北陸系統の弥生式土器にみられるものであるが、この施文法の原則は刺突である。したがって本例は北陸系統のものと関連を有していることは明らかであるが、平行短線文による羽状文が内蔵する意味・内容については玉の問題と共に将来に託したい。

（金子拓男）

## 第2節 川治百塚と第6号塚の性格

### 〔1〕 新潟県における塚について

新潟県内における塚の記録は宝曆6年に出版された丸山元純の「越後名寄」、文政年間に小田島允武の書いた「越後野志」に朝日百塚に関する記載があり、また天保年間に著冊された鈴木牧之の「北越雪譜」にも塚の記事が散見されるが伝承の域を出ていない。

昭和25年に寺村光晴は小島谷の十三塚を紹介し（寺村光晴 1950）、また同年小林存は信仰生活から出た地名で塚という地名を(1)藤塚系統、(2)灰塚と糠塚、(3)庚塚、(4)動植物に因んだ塚、(5)初鹿塚と釜塚、(6)いろいろの塚、(7)行塚、(8)塚に因んだ地名の8種に分類してその由来について述べている（小林存 1950）。

塚が本格的に調査されたのは戦後で、神林村七ツ塚（椎名仙卓 1962）、黒崎町大墓（戸根与八郎 1973）、小千谷市岡林（小千谷市史編纂委員会 1969）、長岡市糠塚（中村孝三郎 1966）、中之坊塚、越路町朝日百塚（中村孝三郎他 1970）、柿崎町金谷（室岡博他 1972）、上越市北塚（平野団三 1960）、柏崎市軽井川経塚（金子拓男 1965）、六日町寺浦百塚（池田寧 1973）、塩沢町庚申塔塚（中川成夫他 1970）、稻荷社塚（中川成夫他 1970）、おかみ塚（中川成夫他 1973）などの発掘調査例がある。これらの塚は経塚・墳墓と民間信仰の塚の三種に性格が明らかにされている。しかしながら新潟県内には塚・経塚が136ヶ所500基以上存在するが、その性格はほとんどのものが解明されておらず、何の目的で構築されたのか不明である。

塚の立地はその大部分が河岸段丘上・丘陵頂上もしくは寺院の境内およびその近くにあって、現在の集落の出入口や集落郊外および旧街道に沿ってあるものが多く、集落内に存在する例は極めて少くない。また所在する一ヶ所の場所における数は、1基単独のものが最も多く、5~7基あるもの、十三塚と称するように13基あるもの、朝日百塚のように148基以上の塚群として把握されるものもあり千差万別である。そしてこれらの塚には十三塚・供養塚・入定塚・長者・職死者の埋葬あるいは民間信仰の神に関する伝説があり、塚の墳頂部には地蔵尊・馬頭観音・如意輪観音等の石像・庚申塔・二十三夜塔・廻国供養塔等の石塔類、羽黒社・神明社・稻荷社等の小祠、五輪塔や宝篋印塔、時には板碑が安置されている例もあり、近世における塚の活用の一面向を知り得る資料となっている。

塚の形態は平面プランが円形のものと方形のものとがあり、大きさは円形のもので直径10m内外、小さなもので2~3m、高さは1.5~2.0mを測る。方形のものは、新発田市大塙址、安田町六九塚、法塔婆塚、弥彦村某神社の塚、鹿瀬町道心坊塚、上川村経塚、長岡市中之坊塚、熊上の塚、金塚、越路町朝日百塚131号塚、津南町谷内の塚、塩沢町稻荷社塚等11例が

知られ、その規模は一辺7m前後、高さは2m前後を測るものが多く、塩沢町稻荷社塚は中世以降の修法塚ではないかと推定されている（中川成夫 1970）。

塚の内部構造としては、中世墳墓あるいは経塚には土塙と葺石がみられる例が比較的多くある。単に塚と言わざる内部構造の全く伴わないものには、黒色土のみで構築されたものと黒色土と黄褐色土との互層によって構築されている二者があり、そのほとんどの塚からは遺物の出土はみられない。

塚からの出土遺物は原則的には無いのが普通であるが、県内で遺物の出土が知られている塚は下記の通りである。（「新潟県遺跡目録」新潟県教育委員会編による。）

村上市岩船町八日市の神力塚（陶器・板磚・五輪塔）、神林村七瀬の七ツ塚第2号塚（須恵器破片・和鏡・刀子）、同村飯岡の陵（銅製仏像）、同村平林の小丸山塚（甕・鉢・人骨）、同村殿岡のうしろ山塚（和鏡・木炭片）、木原町野地城の七ツ塚（須恵器・瓦器・古錢・人骨）、同町東町の庚塚（摺鉢）、安田町久保の院殿塚（須恵器）、中条町長橋の一里塚（石仏）、小須戸町矢代田の九ツ塚（一字一石經）、吉田町米納津の庚塚（土師器・須恵器）、分水町砂子塚の砂子塚（中世陶磁器）、巻町松野尾の興業の塚（鉢・和鏡・頭錢）、同町竹野町の馬塚（陶質土器）、弥彦村弥彦神社境内の某神社の塚（須恵器）、燕市闘崎のアヤメ塚（須恵器・常滑）、同市三王瀬の君之塚（須恵器・常滑）、加茂市上条の西光寺経塚（須恵器・刀子）、越路町来迎寺の朝日百塚第22号塚（珠洲焼小壺）、長岡市釜沢町の糠塚（珠洲焼甕と片口・刀子）、同市本町東宮本の中之坊塚（珠洲焼甕・人骨）、小千谷市千谷の岡林3号塚（珠洲焼甕・片口・嘉慶3年在銘宝鏡印塔型銅製骨蔵器・人骨）、広神村中家の三ツ塚（大永7年在銘経筒・経文）、津南町下船渡の陣場経塚（経筒3・経文）、同町上郷上田の上野塚（一字一石經）、六日町下原新田の管領塚（刀子）、同町余川の陣場経塚（天文19年在銘経筒）、同猪ノ尻経塚（長寛3年在銘経石）、塩沢町宮之下の大御堂経塚（経筒・和鏡・甕）、同町下一日市の山ノ根経塚（経筒・明鏡）、同町大木六の江戸塚（刀・須恵器・古錢）、浦川原村法定寺の法定寺経塚（甕・経筒・一字一石經）、同村岩室の岩室経塚（一字一石經）、上越市五智国分の北塚（和鏡・古錢・硯・鍋・刀子）、柿崎町金谷の金谷塚（珠洲焼甕・刀子・銅鏡）、能生町能生の坪山経塚（須恵器・陶質土器）、同町大沢のフジ塚（布目瓦）、青海町石垣の天神山経塚（陶質経筒・和鏡）、相川町大浦の京塚（宋錢・人骨）、同町南片辺の鹿の浦京塚（古錢）、同安寿塚（古錢・土師器・須恵器）、羽茂村経ヶ峯のはしり塚（須恵器）等があり、この他に木炭や礫を出土した例もある。上記のもので知られるように遺物が検出されている塚は、墳墓・経塚・行人塚などとその性格を比較的容易に知り得ると言える。

（戸根与八郎）

## 〔II〕 密教と塚の形態

盛土遺構である塚の外部形態は、その平面プランに円形と方形の二形態がある。方形をなす塚は、その側面が台形状を呈するものと多壇状をなすものがあり、3種に大別される。

この塚の外形の相違すなわち「かたち」の相違は、「ある「かたち」を備えるのはそれがある機能を充そうとする為の合目的な意図」（小林達雄 1967）から発生したと考えられるから、上記の三種の塚はそれぞれ異なる目的・機能があったものと推定される。塚はすでに宗教・信仰と関係あることは周知のことであるが、とすれば塚の形態が、すなわち「かたち」としての表現・造作が常に信仰・宗教の論理的背景によって決定されると思われる。

塚の発生は墓制との関連において考えるべきものと思われる。奈良時代の墓形態が平安時代の中頃から漸次変質してゆく傾向がみられ、鎌倉時代には明らかに地上構造の異なる墓碑パターンが成立している。「墓上之木枝靡有如聞……」（万葉集 1809）、「累世不侵而今樵夫成市採伐冢樹先祖幽魂永失所帰」との菅野朝臣真道等言上（日本後紀延暦18年3月丁巳条）があり、承和2年の空海の墓は「墳石造壇立卒兜波其上」（元亨积書）となり、醍醐天皇の後山科陵造営に際しては「山作於山陵立卒都婆三基」といわれ（醍醐寺雜事記延長8年10月12日条）、十界図や法然上人絵伝には塚がなく卒都婆のみの絵がみられる。このことから塚状のマウンド（封土）をもつ墓制は、（封土+樹木）→（封土+卒都婆）→（宝塔・卒都婆）→（石卒都婆=骨蔵器）の変遷が知られるのである。墓がマウンドをもたなくなった時代は、墓が寺院境内に建立されるようになった平安時代の後半期以降であろうと考えられる。一方、塚状の墓パターンは上記のことと逆比例して墓制から別離し、全く異質の目的をもった機能としての役割が与えられるものであろう。たとえば經塚の埋甕パターンは古来の墓制を確実に踏襲しており、それを立証するものと言えよう。

上記の如くの墓制の変化や經塚の発生は、密教の影響下においてであり、密教をその基盤として展開しており、それらの動きと表裏一体をなすと思われる塚の発生とその展開も密教と深い結びつきによるものであろう。このことについては先学の指摘もある（堀一郎他1948）。

日本の密教の主流が空海によって創出されて以来、その影響が圧倒的に後世を支配することになるが、彼の創唱になる「六大体大説」は日本密教の形而上学となった。すなわち密教の本質が六大説であって、六大（地大・水大・火大・風大・空大・識大）は密教の認識論的実践哲学的・宗教的なものを内蔵しているといわれる。六大の属性と内容はここでは省略するが、五輪塔が五大の形色を組合せた法界の標識として、如來の三摩耶を表示する「かたち」として具象化されたものであるように、一定の形態をもつ塚もまたそれが密教の理論的な実践として考えると、塚の「かたち」も六大にその根拠を求められはしまいか。

円形プランの塚は、その側面はいわゆる土饅頭形の半円形であり、黒色土のみにより構築される場合が多い。黒色土は顔色の黒に、半円形は形色の半月形に相当し、またこの塚が供養に利用されることから業用の長養もこの塚の要素となるべき面をもっている。これはまさしく風大（KHa）を具象化したものと推定され、円形プランで側面半円形をなす塚は風大塚とも称すべきものであろう。

方形プランの塚は断面が合形で、墳頂に広い面をもっている。断面は本来方形をなして基壇状をなすものと思われるが、土をもって構築される本塚は、土の性質から法をもつことになったのであろう。方形は六大的地大（a）にあたり、性徳の堅、形色の方、顔色の黄は、方形で黄褐色土により版築される本塚と一致するものと思われ、地大塚と称すべきものかも知れない。

方形プランで断面が多壇状をなす塚は、土塔形態をなしており、いわば土塔塚とも称することができるかも知れない。

### 〔III〕 円形プランで断面が半円形をなす塚

塚は本来墓の意であり、封土をもつ円形マウンドを指す。小治田朝臣安万倡墓は奈良時代を代表する一例であるが、直径4m高さ1mの小円墳状をなし、地下には土壙があり、棺の外棺と骨棺と3枚の金銅製墓誌があった（森本六爾 1926）。封土+上塚〔外容器（骨蔵器+墓誌）〕のパターンである。地下遺構は別として墓の地上遺構としての円形封土は、その後にも継承される。延暦年中の慈光寺開山僧道忠墓（田中一郎 1969）や餓鬼草子にもみられ、一遍上人絵伝の一編の祖父通信墓がそれであり、永楽錢を伴出した石神火葬墓（桜井清彦 1952）、松江檜山第IV号（近藤正 1971）があって、奈良時代から江戸時代までみられる。そして封土すなわち塚上には奈良・平安時代にあって樹木が知られ、平安初期の空海墓・醍醐天皇陵では樹木にかわって石卒都婆の建立がはじまる。以来（封土+卒都婆）のパターンは餓鬼草子にみられるように鎌倉時代へと継承されてゆく。この場合の卒都婆（又は宝塔・耶頭墓・板碑・碑伝）は墓標としてのものであるが、後には封土をもたずに卒都婆が骨蔵器としての機能を備え、卒都婆が墓そのものになる。すなわち、平安中期以来、特に浄土教の成立とその展開のなかで、墓が（封土+卒都婆）→（卒都婆）にかわり、形態的に変質してゆく過程で、塚が本来の墓標から遊離して特殊な意味を内蔵するようになると言える。塚が墓としての機能をもつものがあるにしても、その墓は一般的な墓としてではなく、特殊な身分や固定した階級のものに限定されていったと推定され、この傾向は時代が降るにしたがってより一層助長されたと思われる。

墓制から離れた塚がどのような性格をもつものに変質したか十三塚を例に考えてみたい。すでに十三塚については、柳田國男・堀一郎の研究があり、胎藏界曼荼羅の十三大院に発し

て、十三の数を基調とする信仰によって発生したものであろうとし、十三仏による十三回の追善・十三塚の念佛供養・念佛塚の建立の可能性を主張した（柳田 1948）。

奥州須賀川城主二階堂氏の興亡を記した「藤葉榮衰記」に十三塚の記載がある。それによれば、文安2年二階堂治部大輔の娘が新領主となって入封した二階堂為氏と政略結婚させられたが、父と夫の対立不和のためその間にあって苦しんだ娘は自害した。その後、為氏は治部大輔を倒して須賀川を治めたが、自害した妻の怨霊が夜な夜な枕もとにあらわれ、為氏は病床に伏してしまった。そのため修驗者・陰陽師・高僧貴僧を呼んで加持や大法秘法をやり、巫覡の祈禱や医師の治療をやったが、全く効果がなかった。そこで省原道真の北野天神の例にならって娘を神として祀ることにし、神社を建立し祭祀を行なった。すると為氏の病気はたちまちにして全快したという。さらにその後姫の菩提を弔うべく十三基の塚を造営し、その上に卒都婆をたてて月窓禅師をして塚前で盛大な法要供養をしたという。その結果は「月窓大和尚ノ御結縁ニ依テ、御台ノ御怨念ノ三毒ヲ免ル事ヲ得給テ、ソノ後ハ御幽靈夢ニモ來不給ケレハ、為氏公ハ御病氣忽御平愈有ケリ。」と伝えている。すなわち、怨霊がたたった場合、それを封する有力な方法として神に祀ることと共に十三塚による追善大法要を催すことが必要であったことを示している。

亡者に回会するのはその人の冥福をすすめ、善処に生れることを可能にするためであるが、藤原兼実は安元3年・義和2年・文治元年の3回追善供養のために埋経し（玉葉）、また源頼朝が父義朝の49日の仏事のために板卒都婆を作った（平治物語）等の文献例や平安末期から室町時代にわたる経塚造営に関する銘文、元弘3年5月15日の分倍河原の戦における戦死者供養板碑（小沢国平 1960）、東京都（稻村坦元 1955）・越後（篠崎四郎 1937、細谷菊治 1972）・福島県（田中正能 1972）・岩手（司東真雄 1964）等の東国における中世板碑には追善供養が盛んであることが知られる。十三塚が追善供養のためのものもあることを先述したが、経塚造営も板碑あるいは五輪塔の建立もまた追善供養を目的としている例が多く、これらは手段・方法において相違はあるが、共通の意識に基づくものとの把握が許されはしまいか。

板碑には十三仏板碑がある。十三仏板碑には十三仏を示す十三の種子が刻まれており、追善供養・逆修・月待が板碑建立の目的として知られる（小沢国平 1960）。したがって十三仏板碑は追善供養ということでは十三塚と同一目的であり、十三仏板碑＝十三塚であり、板碑の種子は十三塚の塚に比定されることになろう。すなわち、仏＝種子＝塚との関係を知り得るのである。十三塚・経塚・板碑・五輪塔・板卒都婆の目的が、共に追善供養なる点では同一であって、手段・方法の相違はそれぞれの行為の間に觀念的な差や経済上の差があったのかも知れない。しかし、同一性との点でみれば、仏＝仏像＝經典＝種子＝塚と繋がり、塚の

構築が仏像製作と本質的に同じく、同時に塚が逆修や月待等の目的をもっていたであろうことが逆説的に可能となり得る。塚は追善供養・逆修の方法として、特に怨靈退治の機能を有する最も強力のものであったのかも知れない。

近世の庚申信仰がその信仰行為の結果として、青面金剛尊の石像を造り、庚申塔なる石塔を建て、あるいは塚を構築している。仏=石像=石塔=塚であったとき、塚は青面金剛尊そのものであり、庚申信仰が塚を構築するとの行為は、容易に理解できると同時に、近世民間信仰の神仏が、塚なるものに具象化されたとの推定が可能と言えよう。

円形プランを有し、断面半月形の風大塚は鎌倉時代以降の信仰の対象としての仏を具象化したものと考えたい(A型)。また上人塚・行者塚と呼ばれる修驗関係の塚が多いことや、松江檜山墳墓群(近藤正 1971)の如く修驗の墓が風大塚を形態をなすことも、修驗が即身仏を本質とすることから風大塚が活用されたものと思われる(B型)。なお同形態であっても一里塚(長野県教育委員会 1970)や藩境塚と呼ばれる塚のように政治的・行政的な意的で構築された異質の塚もある(C型)。経塚をここでは一応D型としておきたい。

#### 〔N〕 方形プランで断面が台形をなす塚

本形態をとる塚は次の5種に分類される。

A型 内部遺構がみられず、塚の墳頂部が面をもち、その面に石組・配石等の遺構をもつ場合もあり、時に遺物が発見される場合がある。周溝はない場合が普通である。塚は黄褐色土の互層による版築法で朝日百塚131号塚(殿様塚)(中村孝三郎他 1970)がこれにあたると考えられる。密教の修法壇で増益護摩の際には方形壇を構築し、赤黄色の土を塗るものに比定されるもので大壇・水壇(日下敵道 1933)を示唆する。

B型 他の風大塚と関連して風大塚と同様に(塚=仏)の関係にある塚である。たとえば十三塚の第7番塚がこれであり、富山県小杉町十三塚第7号塚(小島俊彰 1971)や横浜市野庭町の十三塚(赤星直忠 1973)がある。なお前者は茶褐色土の互層による盛土で、後者は黒色土による盛土である。

C型 A型と基本的には同じが、松江檜山XV墓(近藤正 1971)の如く、方形盛土の塚の下に土壠をもち修驗の墓と確認されるもの。

D型 方形壇状を呈し、時には浅い溝が4面に回摺し、4隅には柱穴又は礎石がおかれて、中央には骨蔵器あるいは焼骨を入れたピットがある。塚上には建築物の存在が推定され、石組の基壇状をなし、あるいは塚上面が全面に敷石が施されるものもある。新潟県の伝高阿廟址や群馬県の月船環海の墓所普光庵址(中川成男他 1959)が代表するもので、三重県東庄内B石龜墓(谷本鏡次 1970)、東京都稻城町入定塚(稻城町誌編纂委員会 1967)がそれに相当するものと思われる。

E型 真言葬法による火葬地と考えられるものである。古事略記によれば、火葬のあとを整地して塚をきずき、石卒都婆をたて、釘貫を廻立し、松を植えて四方に溝を掘ると伝える。塚の基底部の旧地表面上に平坦で低い土壇状の活用面をもち、四面に周溝があぐる方形のもので、灰・木炭・焼土・カワラケ等の葬儀に使用された遺物やその際生じた現象が検出確認できるものである。松江松本修法塚（横山純夫他 1971）、横浜市堀口修法塚（佐野大和 1967）、尾塙58A（坂田邦洋他 1973）がこれにあたると思われる。特に松本修法塚と尾塙58Aでは五輪塔が出土しており古事略記の記載そのものと言える。金沢町大塚（赤星直忠 1932）も本型に入るものと思われるが、塚は円形プランであったらしい。

#### 〔V〕 方形プランで断面が土塔状をなす塚

宮城県宮城町想海塚、茨城県行方郡小高大塚がある。新潟県では長岡市の熊上の塚がそれらしい。想海塚は方形三段の基壇状をなし、初壇一辺は17mあって周溝があぐり、参道とみられる張出がある。初壇の壇端には玉石が配され塚を回撫する（志間泰治 1957）。小高の大塚は一辺32mの方形3段の基壇状をなし、高さは4.5mである（大森信英 1964）。この2例の塚は共に宋錢が出土しているので鎌倉期から南北朝期頃のものと推定される。この種のものについては、系統の明確を欠き、史料的に判断する資料がないが、形態的には玄坊の首塚と呼ばれる奈良市の頭塔や熊山戒塚と称されているもの、大野土塔・八天石藏等の例や戒塚と酷似しており、土塔の系類に属するものではないだろうかと考えている。

#### 〔VI〕 川治百塚と第6号塚

本調査の対象となった川治百塚第6号塚の調査結果を集約すると下記の如くである。

- 1) 基底部が14.5m×13.0m、墳頂部が4m×4mの平坦面をもち、高さ約1.2mの方形プラン、断面台形をなす塚で、土積量は約350m<sup>3</sup>である。
- 2) 塚の基底部には活用面がない。
- 3) 黒色土の盛土ではなく、黄褐色土をもって版築し、上表に黒色土を盛っている。
- 4) 塚内部には遺構はもとより焼土・炭灰・骨等は全くみられない。
- 5) 塚の基盤層である黒色土層は自然堆積の状態であり、攪乱は全くうけていない。
- 6) 墳頂上面には配石遺構らしきものが存在した。
- 7) 塚からは土師器・近世陶磁器・打製石斧・砥石・鎌・踏鉄・刀子・刀が出土したが、塚に関係するものは刀・刀子各一口であると思われる。
- 8) 塚の盛土は、塚周辺を削平した土をもって行ない、塚はこれにより生じた巾約5mの平坦面がドーナツ状に回撫する。
- 9) ドーナツ状平坦面の外端にはU字形の溝が走る。

以上のことから川治百塚第6号塚は風大塚・土塔塚ではなく、地大塚であり、遺構・焼土

灰・木炭等の検出はなく、したがって地大塚A型に属するものと考えられる。また基盤層の攪乱がないことから密教の増益護摩の修法壇（水壇）と把握される。

しかし本塚は本塚1基のみにて結論を出し得るものではなく、現存する9基の塚はもとより、過去に存在したであろう数多くの塚の1基、すなわち川治百塚の塚群の1基として解すべきものであろう。

川治百塚の造築年代については明確ではない。また数多くの塚がある限られた時期に一つの機能をもつものとして造営されたものか、あるいは個々に機能をもつ目的で造築され、結果として塚群を形成したのかどうかは定かではない。しかし、第10号塚から出土せる浜洲梅樹双雀鏡は鎌倉時代の作品であり、第14号塚出土の古銭中に永楽通宝の混入を否定する地主の言もあることから、鎌倉時代から室町時代の前半の造築との推測がなされうる材料をもっている。

川治百塚は、第6号塚の本例以外は風大塚である。この風大塚中に（B型）・（C型）は存在しない。第18号塚は経塚（D型）の可能性もあるが定かではなく、本塚群の風大塚は基本としては（A型）である。すなわち、川治百塚は1基の地大塚（A型）と多数の風大塚（A型）とをもって構成されたものと理解しても無理ではないように思われる。

塚が追善供養のためにも構築されるものもあることは先述したが、また「怨霊のたたり」を封する有力な手段であることも明らかにしてきた。これが正しいものとすれば、この地に残る南北朝の勇者羽根川氏の怨霊伝説と結合して川治百塚を考えることができよう。特にこの羽根川の地は、羽根川氏滅亡のあと上杉氏にとって関東進出の交通の要衝であり、信濃川を渡る「渡し場」としての難所であった。このため上杉氏軍団将兵の渡河の安全を祈る意味を内蔵しているかも知れない。いずれにしても羽根川氏の怨霊がこの地にあり、琵琶懸城内に三十三観音を建立せねばならなかった事實を重視したい。

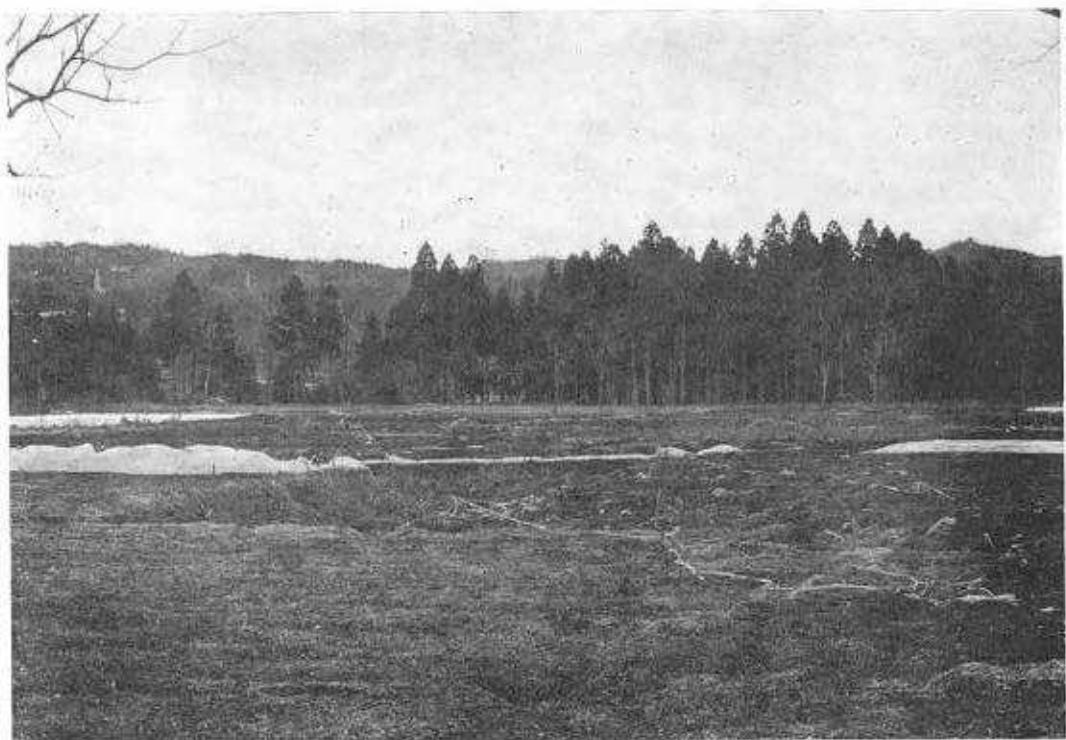
（金子拓男）

### [引用参考文献]

- ア 赤星 直忠 1972 「神奈川県金沢町大塚調査報告」史蹟名勝天然記念物第7集11号  
赤星 直忠 1973 「横浜市港南区野庭町坂口十三塚発掘調査概報」日本道路公団
- イ 池田 享 1973 「六日町の文化財」  
稻岡 嘉彰 1969 「中魚沼の先史遺跡と小根岸のアメリカ形石鏃」N・K・H(長岡市立科学博物館報)第16号  
稻岡 嘉彰 1972 「新潟県十日町市牛ヶ首遺跡について」信濃第24巻第1号  
稻城町誌編纂委員会 1969 「第2編歴史」稻城町史  
稻村 勉元 1955 「武藏野の青石塔婆」東京都文化財調査報告第2集
- オ 大森 信英 1964 「茨城県行方郡大塚古墳」日本考古学年報 12  
小沢 国平 1960 「板碑考」新世紀社  
小千谷市史編纂委員会 1969 「百塚の謎」小千谷市史上巻
- カ 金子 拓男 1965 「新潟県柏崎市上軽井川の経塚」越佐研究第22集  
神村 透 1969 「中部山岳の弥生文化」新版考古学講座4 雄山閣  
神村 透 1972 「北原遺跡—弥生中期北原式土器と石器群—」長野県高森町教育委員会
- キ 桐原 健 1963 「栗林式土器の再検討」考古学雑誌第49巻第3号  
ク 日下 敏道 1933 「真言秘密の解剖」成光館
- コ 小出 義治 1955 「佐渡に於ける後期弥生式文化の限界」国学院雑誌第56巻第2号  
小島 俊彰 1971 「小杉町十三塚遺跡調査報告書」富山県教育委員会  
小林 存 1950 「信仰生活から出た地名」県内地名新考下巻 高志社  
小林 達雄 1967 「縄文晩期における<土版・岩版>研究の前提」物質文化10  
近藤 正 1971 「松江・檜山古墓群」鳥取県埋蔵文化財調査報告第Ⅲ集
- サ 坂田 邦洋 1973 「尾瀬—熊本県下益城郡城南町尾瀬中世墳墓群の調査」熊本県文化財調査報告第12集  
桜井 清彦 1952 「岩手県胆沢郡石神経塚」日本考古学年報 5  
佐野 大和 1967 「横浜市金沢区富岡町における修法壇遺跡の調査」横浜市文化財調査報告4
- シ 椎名 仙卓 1962 「七ツ塚」磐舟—磐舟御跡推定地調査報告書—新潟県文化財調査報告書第九

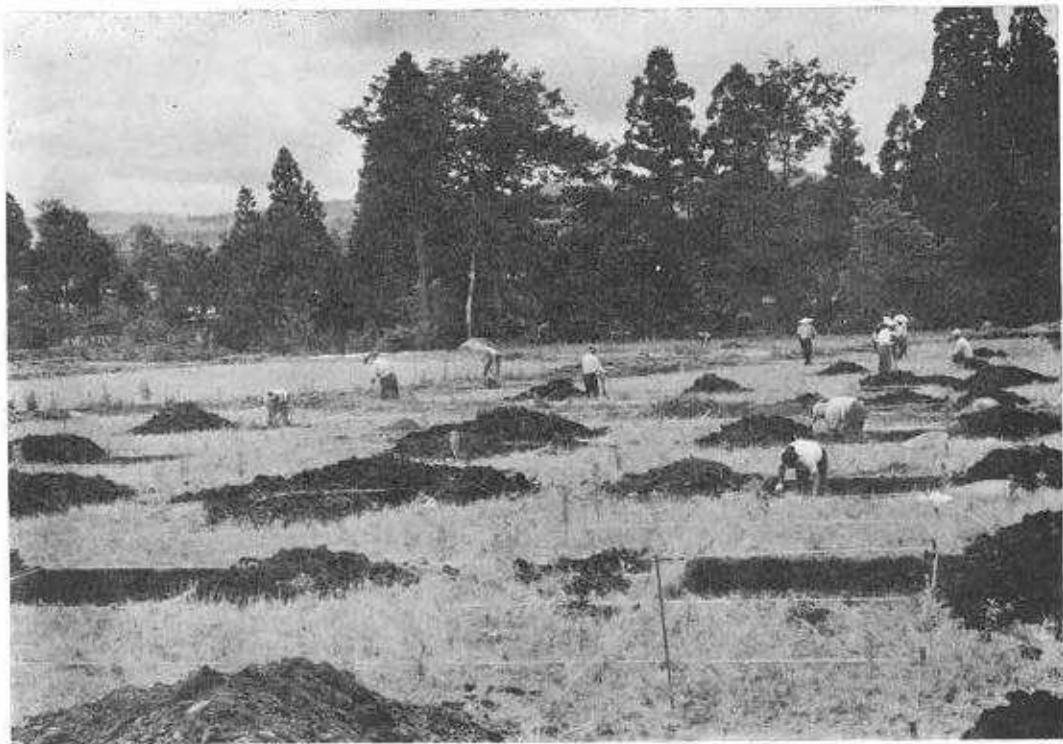
- 司東 真雄 1964 「岩手県の板碑」歴史考古第11号
- 篠崎 四郎 1937 「越後南魚沼地方の供養塔婆」考古学雑誌第27巻第3号
- 信濃史料刊行会 1956 「信濃考古総覧」下巻
- 信濃川段丘グループ 1968 「新潟県津南地域の第4系—新潟県の第4系そのX—」  
新潟大学教育学部高田分校研究紀要第13号
- 信濃川段丘研究グループ 1970 「新潟県十日町附近の段丘について—新潟県の第4系  
そのXIII—」新潟大学教育学部高田分校研究紀要第15号
- 志間 泰治 1967 「宮城県宮城町想海塚遺跡」日本考古学年報20
- セ 関 雅之 1972 「田伏玉作遺跡」糸魚川市教育委員会
- タ 田中 一郎 1969 「慈光寺蔵骨器」埼玉県指定文化財調査報告第6集
- 田中 正能 1972 「福島県の石造文化財」福島県文化財調査報告書第32集
- 谷本 銳次 1970 「東庄内B遺跡」三重県埋蔵文化財調査報告5
- チ 茅原 一也 1958 「新潟県十日町～津南附近の地形及び地質」妻有郷 新潟県文化財  
年報第三
- テ 寺村 光晴 1950 「十三塚の塚数え」十三塚—古代の島田村—島田村史第2集
- ト 戸根与八郎 1973 「西蒲原郡黒崎町大墓遺跡調査報告」北陸高速自動車道埋蔵文化財  
発掘調査報告書 新潟県教育委員会
- ナ 内藤 博夫 1965 「新潟県十日町市付近の地形—魚沼地方の地形発達史についての若  
干の考察」地理学評論38—10
- 長野県教育委員会 1970 「御代田一里塚」長野県指定文化財調査報告第3集
- 長野県考古学会 1968 「シンボジュム 特集弥生文化の東漸とその発展」長野県考  
古学会誌第5号
- 中川成夫 芹沢長介 本間嘉晴 石沢寅二 1958 「妻有地方の考古学的調査」妻有郷  
新潟県文化財年報第三
- 中川成夫 岡本 勇 1959 「越後草報寺中世墓址群の調査—中世禪僧墓制の考古学的  
研究(1)」
- 中川成夫 本間嘉晴 椎名仙卓 岡本 勇 加藤晋平 1964 「考古学からみた佐渡」  
佐渡—自然・文化・社会—
- 中川成夫 加藤晋平 岸上興一郎 1970 「新潟県南魚沼郡塩沢町吉里古墳群の調査」  
塩沢町教育委員会
- 中川成夫他 1973 「雲洞・鎌岩おかみ塚の調査」塩沢町における考古学・民俗学の調  
査Ⅱ 塩沢町文化財調査報告3

- 中村孝三郎 1966 「経塚」先史時代と長岡の遺跡 長岡市立科学博物館考古研究室調査報告書10
- 中村孝三郎 神林昭一 1970 「朝日古墳遺跡」越路原総合調査報告書朝日百塚・並松遺跡 越路町教育委員会・長岡市立科学博物館
- ニ 新潟県第四紀研究グループ 1971 「地形分類図よりみた新潟県の地形区—新潟県の第4系そのXIV—」新潟大学教育学部高田分校研究紀要第16号
- 新潟平野団体研究グループ 1972 「新潟県小千谷市周辺の第四系—新潟県の第4系そのXVI—」新潟大学教育学部高田分校研究紀要第17号
- ハ 橋本 澄夫 1968 「石川県小松市八日市地方遺跡の調査」石川考古学研究会誌第11号
- ヒ 平野 団三 1960 「越後国分寺國分尼寺の研究」直江津市教育委員会・直江津市史蹟保存会
- ホ 細矢 菊治 1972 「先史時代から中世まで南魚沼郡の歴史」
- 堀 一郎 柳田国男 1948 「十三塚考」三省堂
- ミ 水沢村史調査委員会 1970 「歴史篇」水沢村史
- ム 室岡 博 寺村光晴 1972 「越後国柿崎町金谷の墳墓」歴史考古第7号
- モ 森本 六爾 1926 「小治田朝臣安萬侶の墳墓」中央史蹟第10巻5号
- ヤ 柳田国男 堀 一郎 1948 「十三塚考」三省堂
- ヨ 横山純夫 近藤 正 1971 「松江・松本修法跡」島根県埋蔵文化財調査報告第Ⅲ集



城之古遺跡全景(東より)

1

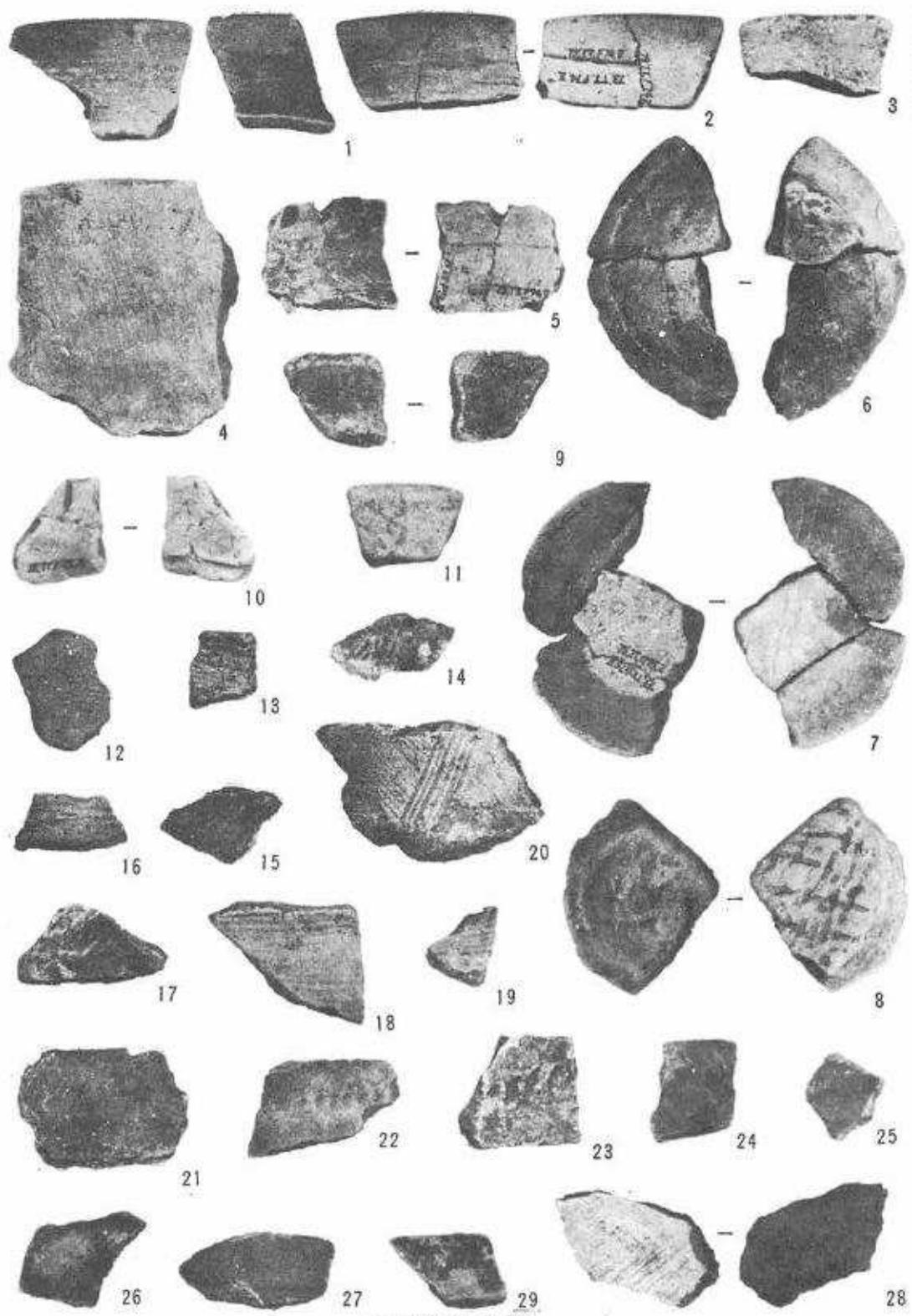


城之古遺跡発掘状況

2

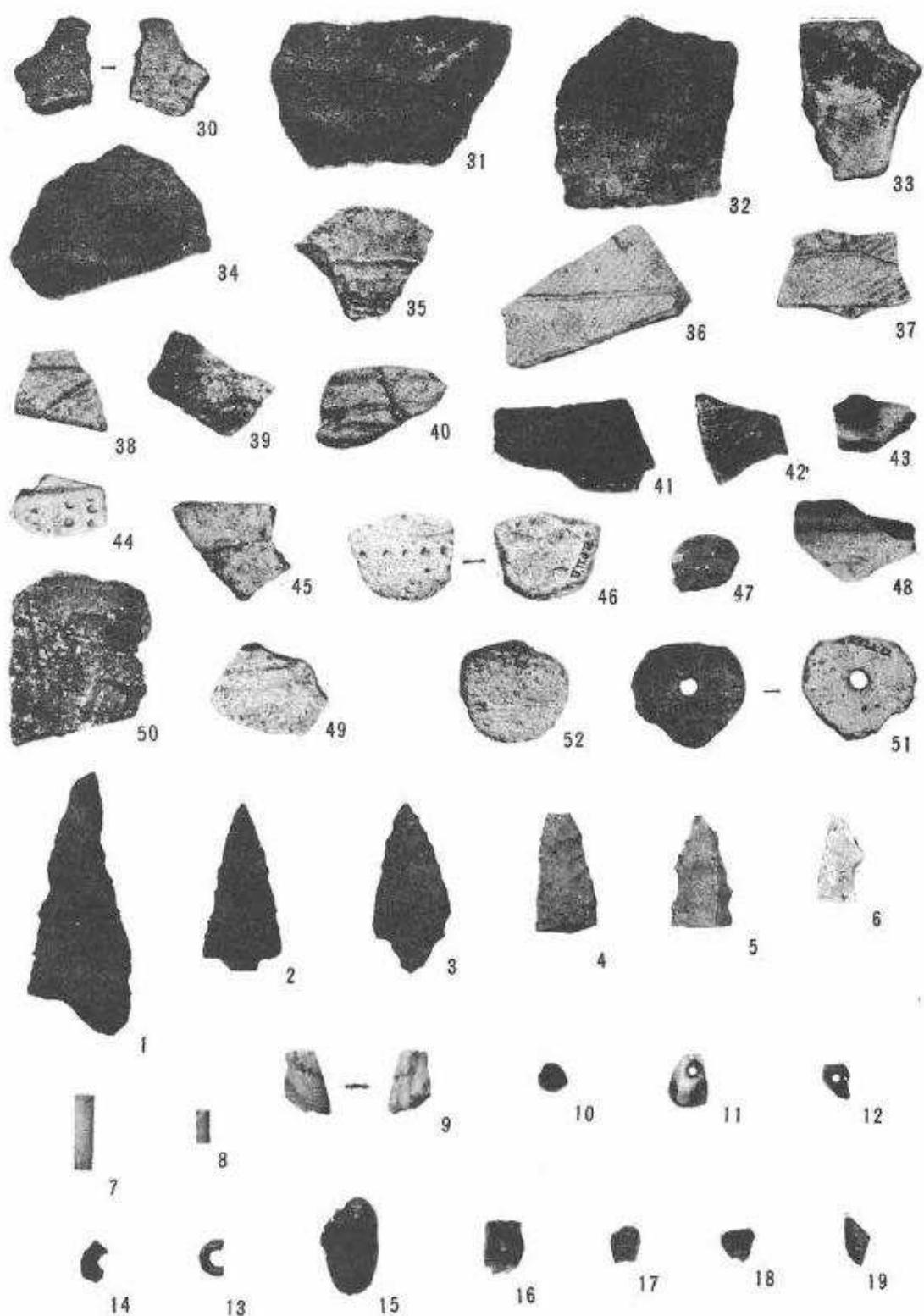


1. 城之古遺跡崖下の湧水地 2. 城之古遺跡G-75土器出土状態 3. 城之古遺跡F-76有孔土製品出土状態

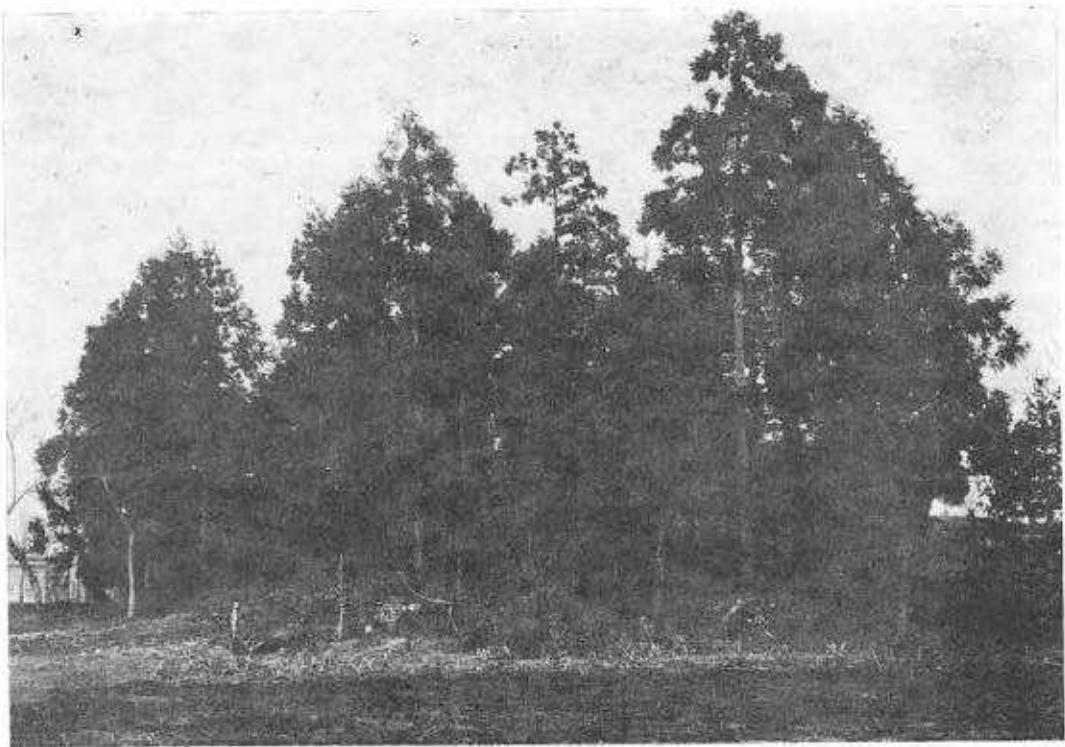


城之古遺跡出土土器

圖版第四圖

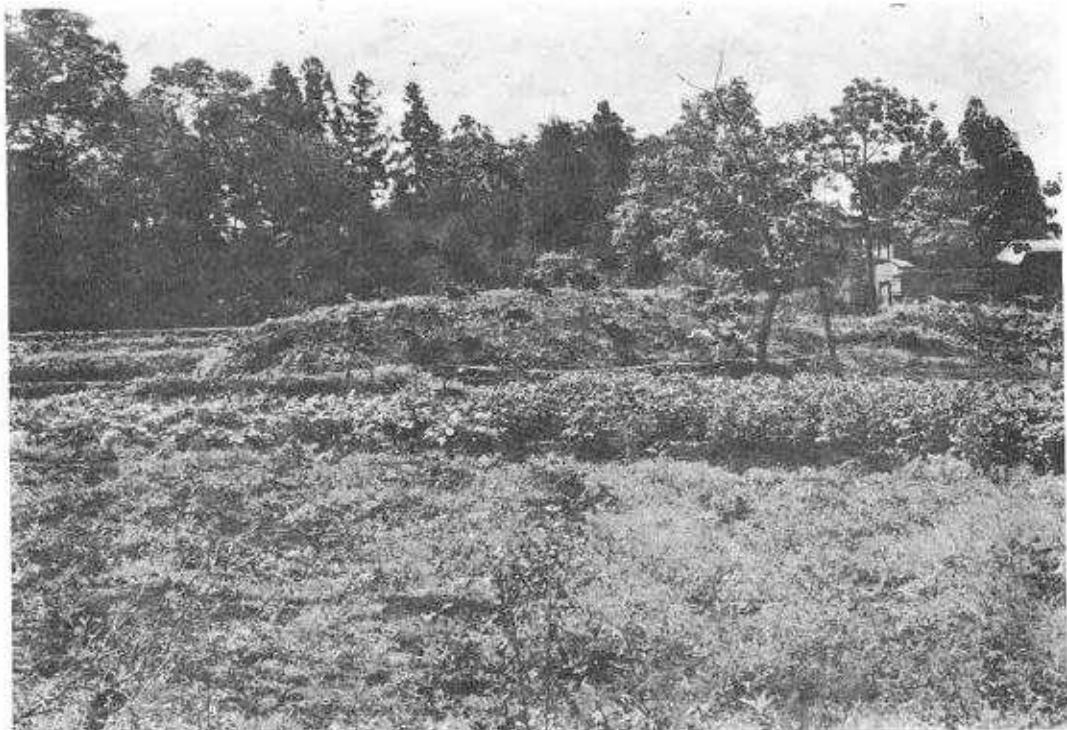


城之古遺跡出土土器・土製品・石器



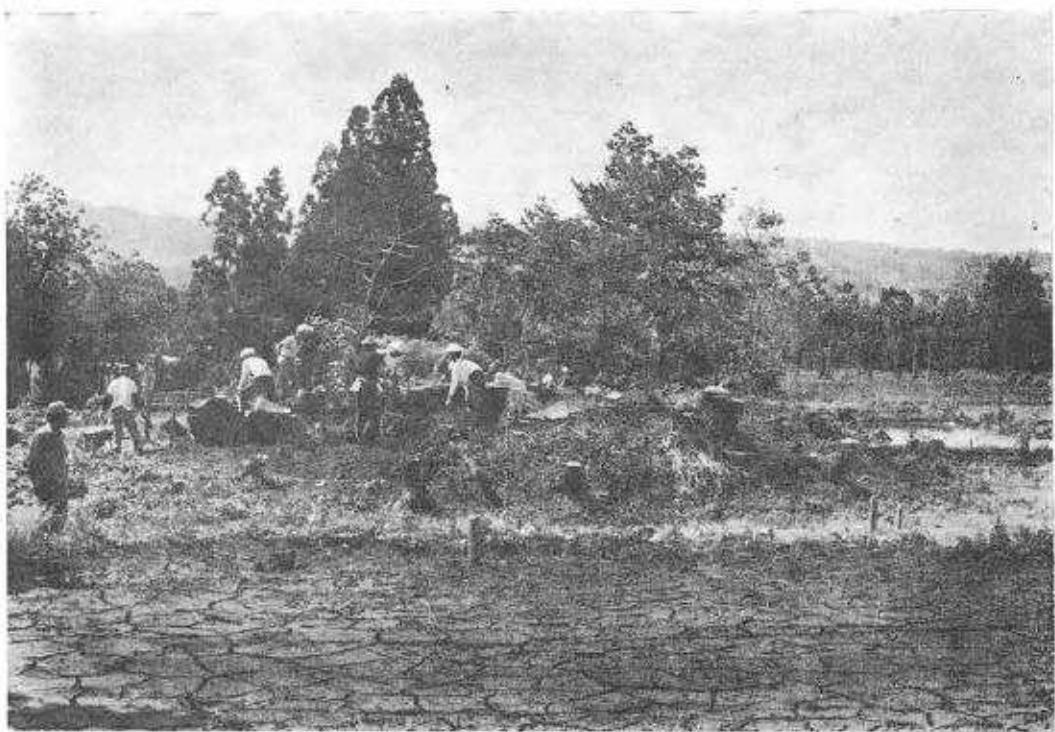
第6号塚旧全景(南西より)

1



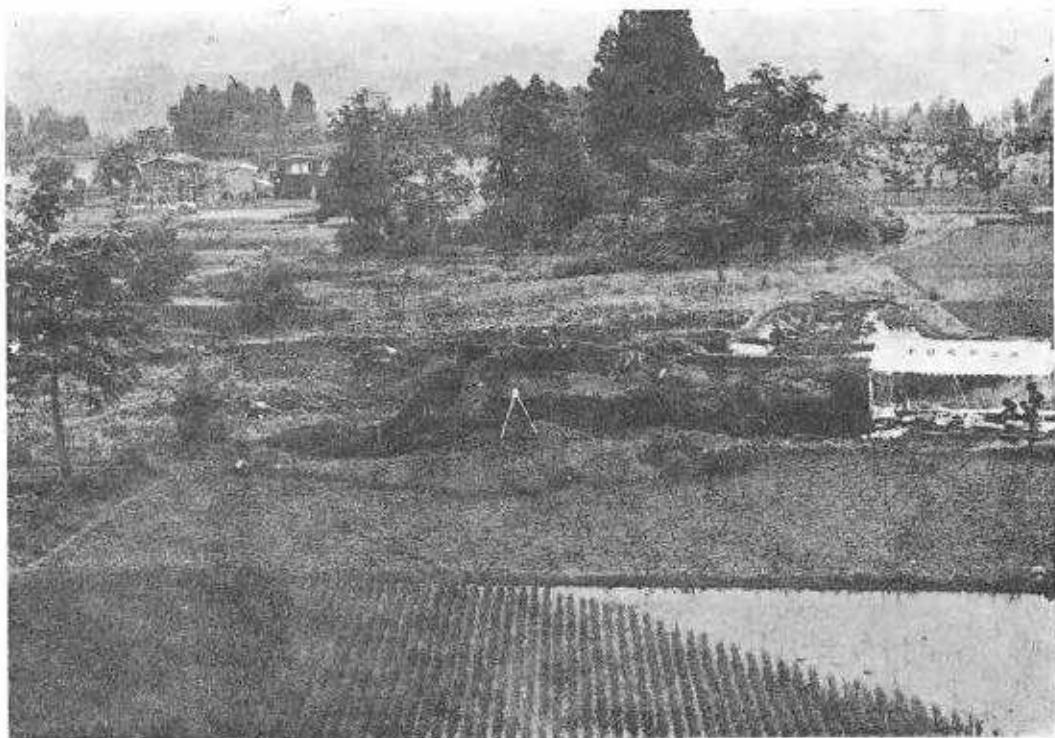
第6号塚立木伐採後の全景(北西より)

2



第6号塚発掘スナップ

1



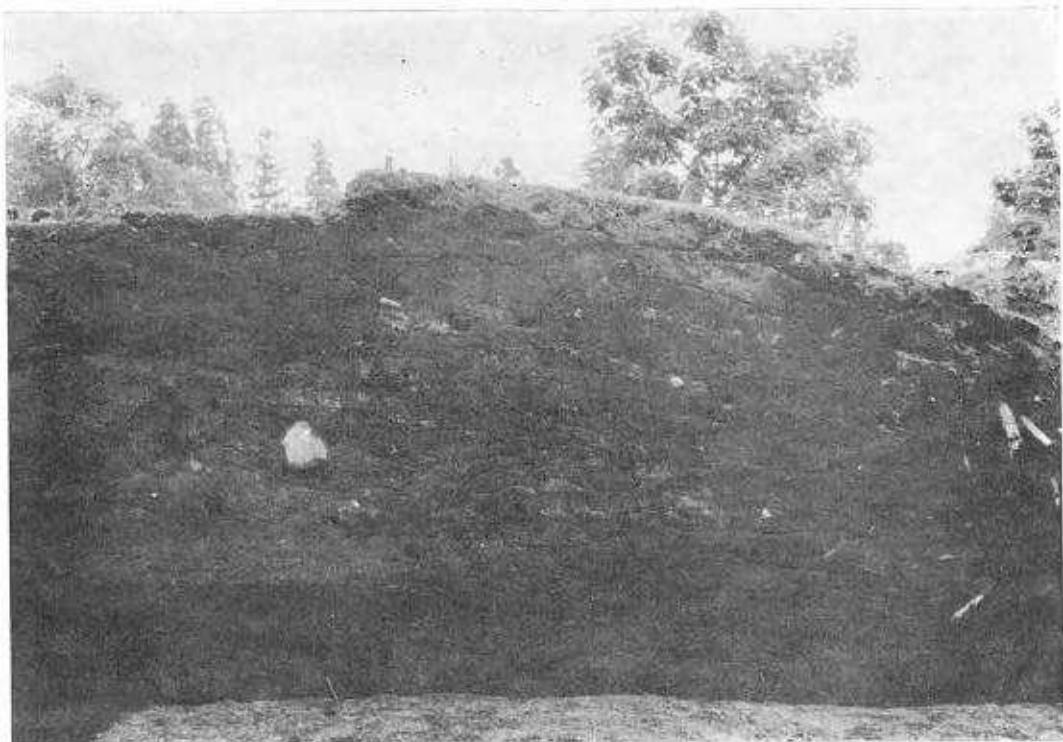
第6号塚発掘状況

2



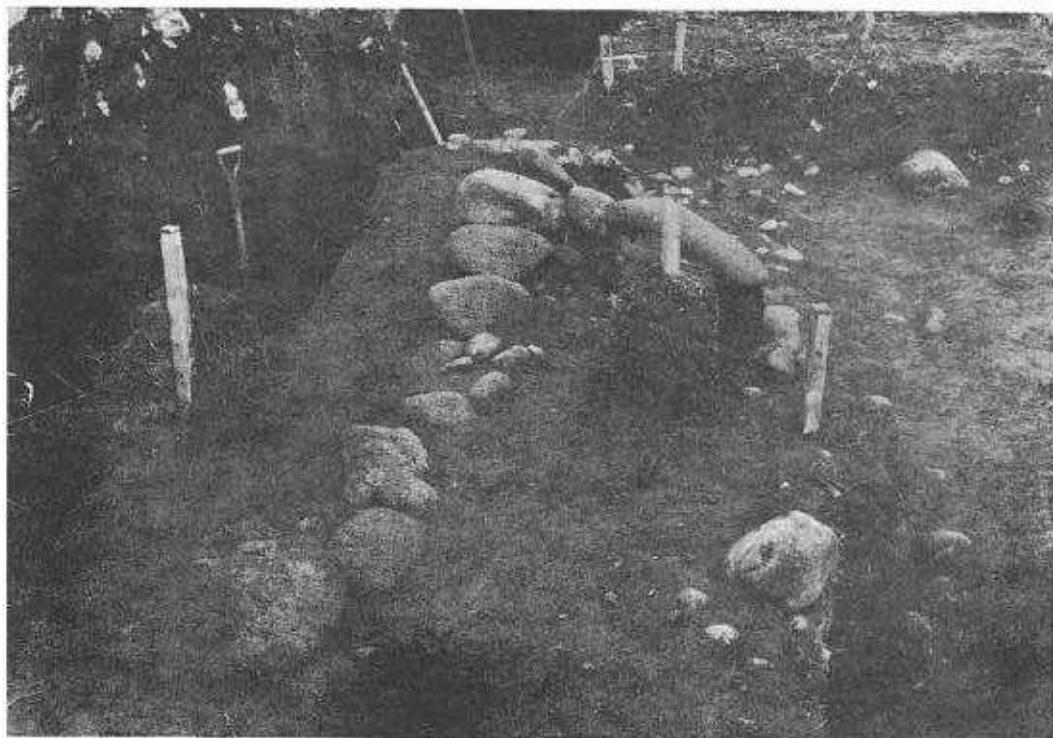
第6号塚19D～19G北西セクション

1



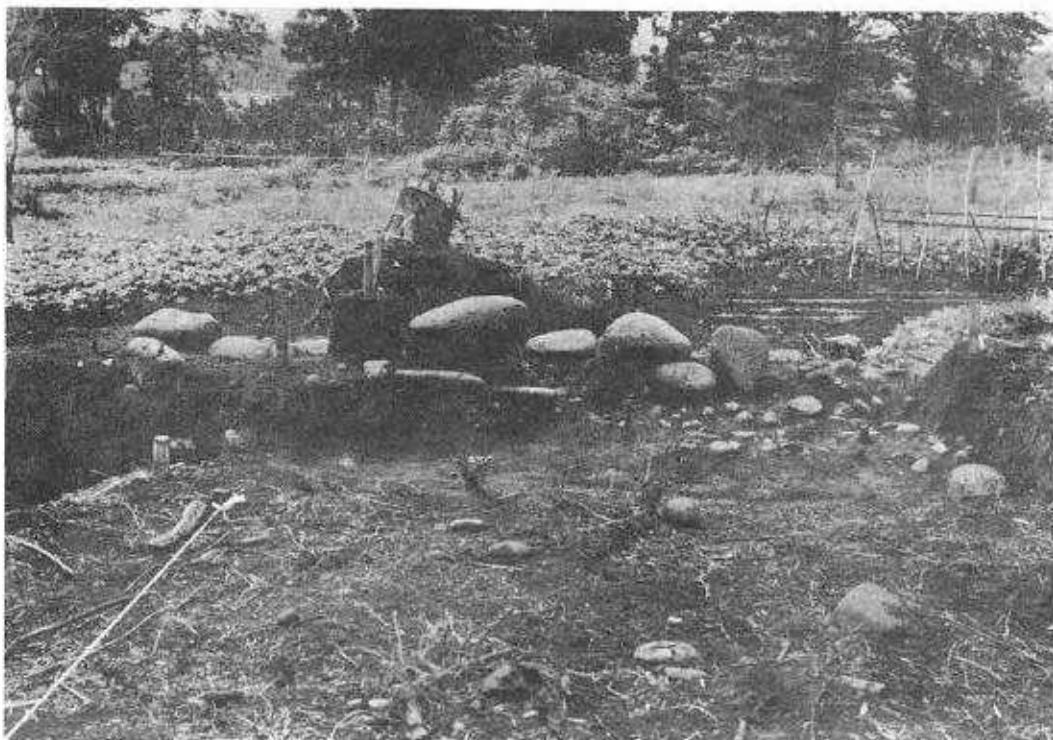
第6号塚19G～20G南西セクション

2



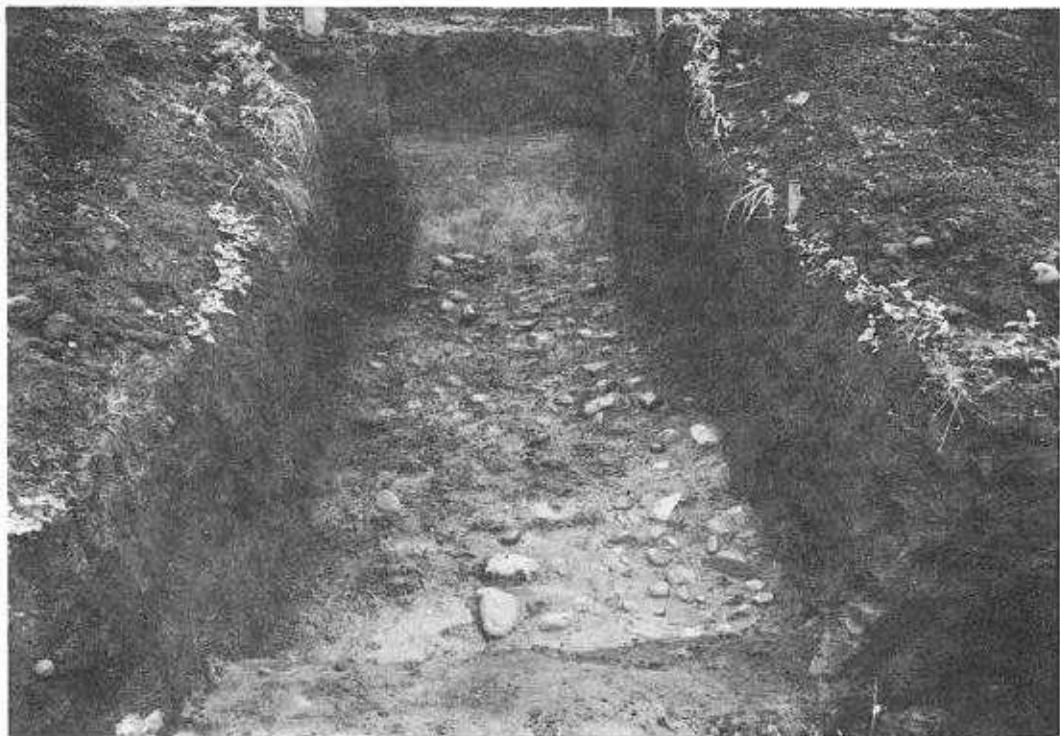
第6号塚石組(南西より)

1



第6号塚石組(北西より)

2



第6号塚19M~19Oにおける周溝

1



第6号塚11G~13Gにおける周溝

2



1

刀出土状態



刀子出土状態

2



土師器出土状態

3



4

刀出土状態

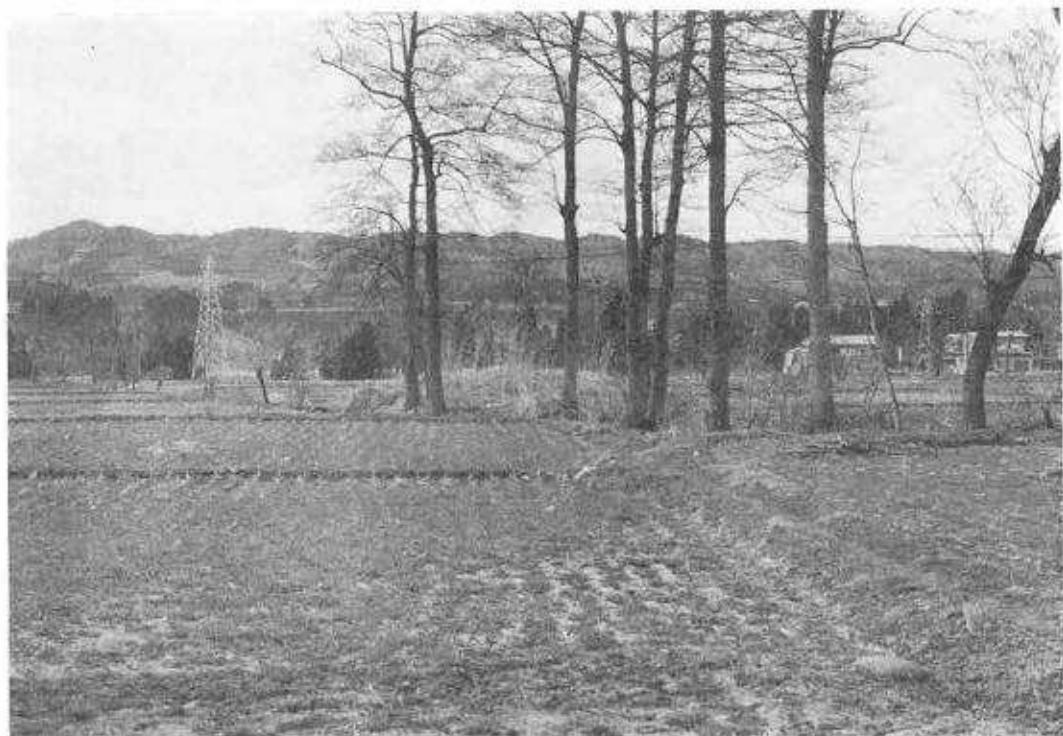


第6号塚出土遺物



第7号塚全景(北東より)

1



第19号塚全景(東より)

2

埋蔵文化財緊急調査報告書第2

埋蔵文化財発掘調査報告書

北越北線

—1974—

昭和49年3月25日印刷

昭和49年3月31日発行

発行 新潟県教育委員会

印刷 ①長谷川印刷

新潟市学校町通1番町6

TEL 3309番

埋蔵文化財発掘調査報告書正誤表

ページ	行(欄)	誤	正
6	第2図	下大井田川	南の下大井田川を上大井田川
7	4	白河院御領	後白河院御領
7	8	鳥山・羽根川他の各氏	鳥山・羽根川氏の各氏
7	(註)2	契口越後国	契口 越後国
8	3	東は比高	東には比高
8	4	面積約1.75km <sup>2</sup>	面積約1.95km <sup>2</sup>
8	上から14	鎧坂	鎧坂
8	下から7	鎧坂	鎧坂
8	下から5	鎧坂	鎧坂
11	下から3	疊混入黒色層	疊混入黑色砂層
12	9	(図版第3図…第7図11~33)	(図版第3図1~3, 11~24, 26~29, …第7図11~24・26~33)
12	下から14	付着しる	付着する
16	2	図版第4図34~47	図版第4図34~50
16	5	平坦な	平坦な
17	5	描始め	描き始め
17	8	磨消している	摩消している。
20	3	散在した	散在した
32	5	機態	機能
33	4	(KHa)	(ha)
35	10	風大塚を形態を	風大塚の形態を
35	下から6	方型壇状	方形壇状
35	下から3	(中川成男他 1959)	(中川成夫他 1959)
30	12	(志間泰治 1957)	(志間泰治 1967)
38	18	日下敍道	日下敍道
図版第2図	1	崖下の	直崖下の
図版第9図	2	11G—13G	11G~13G